

千人塚1号古墳発掘調査報告書

養老町教育委員会
2023年3月



第1トレンチ葺石検出状況（北西から）



墳頂部調査区完掘状況（北西から）

序

養老町は岐阜県の南西部に位置し、養老山地に沿って南北に 12km、東は揖斐川に至るまで東西 10km の比較的平坦部の多い地域であり、豊かな自然と多くの文化遺産が残る美しい町です。

これまで実施してきた、象鼻山古墳群や日吉遺跡の発掘調査では、東海地方における古墳の出現や広く古墳時代の始まりを考えるための重要な情報が得られており、これらを整理し、新たな情報を発信することが養老町に求められた課題の一つとなっています。

また、生活の豊かさ、利便性を求めて進められる開発行為の中で失われつつあるその他多くの埋蔵文化財の保護も重要な課題です。

特に、養老山地に形成された段丘面に立地する千人塚古墳群は、大正年間に発刊された『養老郡志』に取り上げられるなど、古くからその存在が認識されていましたが、その後、十分な保護が図られてきたとは言い難く、滅失や所在不明となった古墳も少なくありません。そのような中、令和元年度より行われた発掘調査では、千人塚 1 号古墳が、埴輪や葺石、周溝を備えた全長 35 m に及ぶ円墳であり、築造された 5 世紀後半という時期を見れば、西濃地域においても、その存在が確認されている円墳としては最大級であることが明らかとなりました。ヤマトタケル伝承が色濃く残る街道沿いに立地し、元正天皇の養老改元や養老孝子伝説の舞台となった養老の滝に程近い千人塚 1 号古墳の調査成果は、当該地域の古墳時代研究に重要な資料を呈示したといえます。

本書は令和元年度から令和 3 年度に実施した千人塚 1 号古墳の発掘調査の成果を含めた報告書です。この報告書がより多くの方々に利用され、文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに、調査の実施に際しご協力いただきました地域の方々、また、報告書の作成にあたりご指導いただきました関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

令和 5 年 3 月

養老町教育委員会

教育長 森島 恵照

例 言

- 1 本書は、養老町教育委員会が千人塚1号古墳において行った、試掘調査（令和元年度）、範囲確認調査（令和2年度）、家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査（令和3年度）の成果をまとめた報告書である。
- 2 調査にあたっては、養老町教育委員会が後記の調査団を編成してこれを実施した。
- 3 本書の執筆は廣瀬正嗣（養老町教育委員会生涯学習課）が行った。
- 4 遺物写真の撮影はナカシャクリエイテブ株式会社に委託した。
- 5 遺物整理及び本書の作成においては、以下の方々のご協力・ご指導を得た。
赤塚次郎、酒井将史、中野秀昭、早野浩二（五十音順、敬省略）
- 6 調査記録・出土遺物は養老町教育委員会にて保管している。
- 7 編集は廣瀬正嗣が担当した。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高（TP）である。
- 2 本書掲載の遺物実測図の縮尺は4分の1である。
- 3 本書では遺跡・遺物の時代区分に、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世を用いている。

目 次

第1章 調査の概要	1
1 調査の目的と調査に至る経過	1
2 調査組織と調査の経過	3
第2章 千人塚1号古墳の立地と歴史的環境	9
1 千人塚1号古墳の位置と周辺の遺跡	9
2 千人塚1号古墳の立地と構成	11
第3章 発掘調査の成果	13
1 調査前の知見	13
2 調査の方法	15
3 基本層序	16
4 範囲確認調査	17
(1) 構造について	17
(2) 出土遺物について	24
(3) 小結	26
5 家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査	27
(1) 構造について	27
(2) 出土遺物について	29
(3) 小結	29
6 千人塚1号古墳の築造工程について	31
第4章 考 察	35
1 『養老郡志』に見る千人塚1号古墳の諸様相	35
(1) はじめに	35
(2) 『養老郡志』千人塚古墳群関連記述の整理	35
(3) 発掘調査成果との比較	37
(4) 埋葬施設に関する一考察	37
(5) おわりに	38
第5章 総 括	41
出土遺物写真	43

巻 頭 図 版

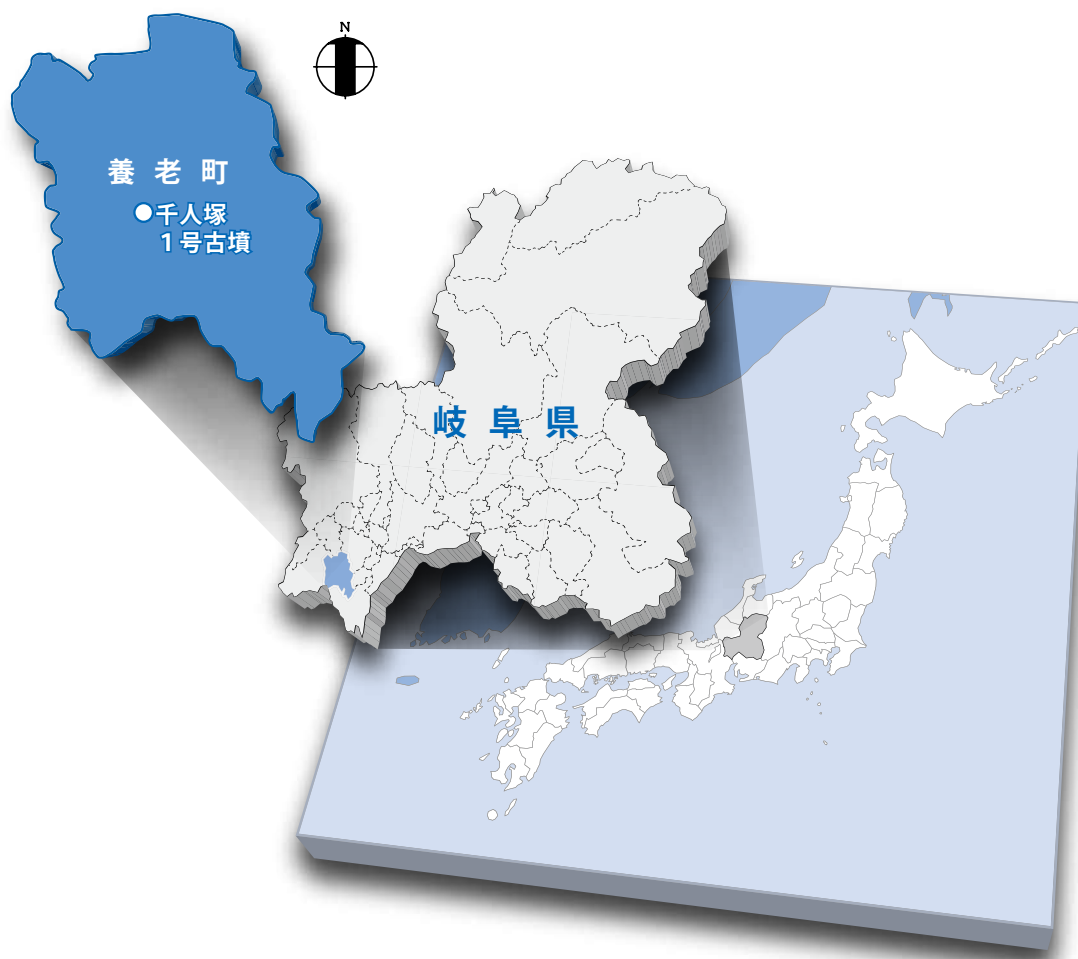
第1トレンチ葺石検出状況（北西から）	巻頭図版 1
墳頂部調査区完掘状況（北西から）	巻頭図版 2

挿 図 目 次

	関連頁
第 1 図 養老町の位置	1
第 2 図 千人塚1号古墳の位置と周辺の遺跡	10
第 3 図 千人塚古墳群の立地と構成	11
第 4 図 千人塚1号古墳鳥瞰図	11
第 5 図 千人塚1号古墳測量図	14
第 6 図 範囲確認調査トレンチ及び墳頂部発掘調査区位置図	15
第 7 図 層序分類模式図	16
第 8 図 第1トレンチ実測図	19
第 9 図 第2トレンチ実測図	21
第10図 第3トレンチ実測図	23
第11図 千人塚1号古墳出土埴輪実測図	25
第12図 千人塚1号古墳範囲確認調査平面図	27
第13図 墳頂部発掘調査実測図	30
第14図 墳頂部発掘調査実測図2	31
第15図 墳頂部東西ベルト及び第1トレンチの層位にみる千人塚1号古墳の築造工程	32

1 調査の目的と調査に至る経過

岐阜県養老郡養老町養老に所在する千人塚 1 号古墳は、養老山地に形成された標高約 50 m を測る下位段丘面に立地している。周囲に点在する数基の古墳と併せて、千人塚古墳群と総称されており、平成 14 ～ 18 年度にかけて養老町教育委員会が実施した遺跡分布調査において、5 基の円墳が確認されている*。また、現地表面の観察より、千人塚 1 号古墳は全長約 25 m の円墳であり、墳丘の周囲を区画する周溝をもつ可能性が指摘されているが、古墳と関わりを示すような遺物は確認できておらず、築造時期は不明となっていた。なお、当時より墳頂部には廃墟となった家屋が残されていることが報告されている。



第 1 図 養老町の位置

* 中島和哉編 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』養老町教育委員会

そうした中、令和元年6月18日付けで、千人塚1号古墳が所在する土地において、墳頂部にある家屋解体工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出され、養老町教育委員会は、埋蔵文化財の有無や古墳の遺存状態を確かめるために事前の試掘調査を行った。

その結果、葺石や周溝、埴輪片の検出により、千人塚1号古墳が良好に遺存していることが確認され、埴輪の出土が養老町内では初めての事例であったことなどから、歴史的価値が高く、将来的に町の文化財として保護すべき重要な古墳であることが明らかとなった。

これを受け、養老町教育委員会は、工事主体者との協議を重ね、墳頂部にある家屋の解体工事を一旦取り止め、より詳細な保護範囲の確認を目的として、令和2年度に範囲確認調査を実施することとなった。

その後、令和3年度に家屋解体工事の実施が決定したことを受け、家屋建設等による古墳主体部への影響の有無を確認するため、家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査を実施するに至った。



千人塚1号古墳墳頂部に建つ家屋の様子（北西から）

2 調査組織と調査の経過

千人塚1号古墳の発掘調査にあたっては、養老町教育委員会を中心として下記の調査団を編成して実施した。また、調査経過については、以下の通りである。

【令和元年度 試掘調査】

試掘調査に先立ち、7月27日より墳丘の測量調査を実施した。完成した測量図の観察より、北東側の墳丘裾が削平を受けており、やや不定形ではあるが、円墳の可能性が高いと判断した。ただし、墳丘北東側に隣接した低いマウンド状を呈す地形が確認されており、古墳と関連する地形である可能性も残った。以上を踏まえ、8月1日より試掘調査を開始し、最も墳丘の遺存状態が良く、長い調査トレンチが設定できる西側の墳丘斜面上に第1トレンチ（長さ8m×幅1m）を設定した。

8月2日に、表土掘削及び地表面に蔓延る竹根の除去を進めたところ、トレンチ東端の墳丘斜面上部より直径15～30cm程度の礫を多数検出し、葺石と判断した。さらに、トレンチの西端において埴輪片を含む周溝埋土を確認し、掘削を開始した。8月7日までに明らかな転石は除去した上で、葺石の検出が完了した。その結果、墳丘斜面中央付近が葺石の下端であり、その周辺の流土から埴輪片が多く出土することを確認したが、同位置の墳丘盛土が大きく攪乱を受けており、埴輪列の位置についての情報は得られなかった。同日、周溝埋土の掘削が完了し、周溝がトレンチ外へ続くことが明らかとなったが、敷地外のためトレンチの延長はできなかった。8月8日には、墳丘斜面中央に、それまで確認されていた墳丘盛土とは色や質が異なる黒褐色砂質土の広がりが見出され、その性格及び墳丘構造確認のために断ち割り調査を行った。その結果、黒褐色砂質土は1号古墳築造以前の旧地表面であり、墳丘を構築する際の基礎となる地山の削り残しであると判断した。

その後、8月27日までに全ての図面作成、写真撮影が完了した。調査終了後は、トレンチの大半を掘削土による土嚢で埋め戻し、表面の10～15cmを旧土で埋めた。



試掘調査風景（第1トレンチ）



試掘調査風景（第1トレンチ）



調査風景（第2トレンチ）



調査風景（第3トレンチ）

【令和2年度 範囲確認調査】

7月29日に調査トレンチの設定を行った。昨年度、試掘調査を行った第1トレンチにおける墳頂部側への葺石範囲・埴輪列の有無・墳頂部にある家屋の基礎埋設状況の確認のため、トレンチを墳頂部側へ4m延長した。また、古墳の全長を確定させるため、第1トレンチの南壁延長軸より南へ45°振った墳丘斜面上に第3トレンチ（長さ8m×幅1m）を、その延長軸上にあたる北東側の墳丘削平部に第2トレンチ（長さ10m×幅1m）を設定した。第2トレンチについては、北東側に隣接して確認されている低いマウンド状の地形も調査対象となるよう設定を行った。

7月31日より、第2トレンチの掘削を開始した。8月5日までに周溝を検出し、埋土に広く埴輪片が含まれることを確認した。8月6日、第2トレンチ北東端において、幅狭の周溝を確認し、北東側で確認されている低いマウンド状の地形が、千人塚1号古墳とは別の古墳である可能性が高まった。8月12日までに周溝を完掘し、第2トレンチにおける掘削作業が完了したため、同日より第1トレンチ延長部の掘削を開始した。8月14日までに第2トレンチの図面作成・写真撮影を概ね終了した。

8月17日には、第1トレンチ延長部において葺石が検出されないことから、その範囲が試掘調査時のトレンチ内で収まっていたと判断した。また、第1トレンチ延長部の東端において墳頂部にある家屋の基礎最深部を検出し、墳頂より約30cm下に碎石及びコンクリート製の基礎が埋設されている状況を確認した。また、その直下より拳大～人頭大の礫集積が確認され、埋葬施設に関連



現地説明会風景



埋め戻し（第1トレンチ延長部）



墳頂部家屋解体作業風景



調査風景（墳頂部調査区）

する遺構である可能性も考慮し、図化を行った。8月19日までに、第1トレンチ延長部の掘削を概ね完了したが、埴輪片の出土が皆無であったため、墳頂部では埴輪を用いていない可能性が高まった。

8月20日より、第3トレンチの掘削を開始。第3トレンチ北東端の墳丘斜面上部において葺石を検出したが、上端が確認できなかったため、北東側に1m拡張した。また、第3トレンチ中央部付近より周溝の墳丘側の肩を検出し、埋土の掘削を開始した。第1・2トレンチ同様、周溝埋土からの埴輪片出土を確認した。同日、周溝がトレンチ外まで続くことを確認したが、周溝延長先の隣地における土地の改変状況から調査は難しいと判断し、トレンチの拡張は行わなかった。8月31日までに第3トレンチを完掘し、9月2日にかけて、第1トレンチ延長部と併せて図面作成・写真撮影を概ね終了した。

9月7日に記者発表を行った。9月13日（日）には現地説明会を開催し、町内外より約150名の参加を得た。9月17日に、第1トレンチの追加調査として、試掘調査において確認した黒褐色砂質土の墳頂部での有無を確かめるため、一部深掘りを行った。その結果、墳頂部においても試掘調査とほぼ同レベルで黒褐色砂質土の広がりを検出することができ、地山であることを再確認した。9月18日に追加の図面作成、写真撮影を終了。

その後、9月24日にかけて、全トレンチの大半を掘削土による土嚢で埋め戻し、表面の10～15cmを旧土で埋めた。



空撮風景



埋め戻し（墳頂部調査区）

【令和3年度 家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査】

7月15日～8月13日にかけて、墳頂部に残る家屋の解体工事に伴う立会調査を行ったが、埋葬施設などの明らかな遺構は確認できなかった。また、解体工事に伴い、墳頂部においてコンクリートや瓦等の瓦礫が多量に散乱・埋没している状況が明らかとなったが、古墳への影響を考慮し、発掘調査時に手作業で除去することとした。

8月16日より発掘調査を開始した。調査は、家屋建設等による古墳主体部への影響を確かめるため、家屋が建っていた全範囲を調査区とした。8月31日までに、調査区内の瓦礫除去及び、家屋による攪乱範囲の掘削が完了した。特に、家屋の布基礎直下には地盤安定化のためと思われる礫が多数敷き詰められており、この礫を取り除いた標高値まで調査区全体を掘り下げ、精査を行った。9月7日には、調査区全体の精査が完了。墳頂中心部付近において、調査区外まで広がる楕円形の平面プランを検出し、大きな掘削坑である可能性が想定されたことから、サブトレンチを設定しその性格の確認を行った。

9月14日までに、サブトレンチの掘削が完了し、堆積状況及びガラス等の出土物から、埋葬施設やその副葬品を目的とした後世の掘削坑である可能性が高いと判断した。また、掘削坑の埋土を除去しなければ、埋葬施設の遺存状態が確認できないため、9月15日より掘削坑の掘り下げを開始した。9月30日にまでに、埋土の除去が完了。掘削坑は、南北4.0m、東西3.7m以上の楕円形を呈し、墳頂より約1.3mの深さまで及び、埋葬施設やその墓坑の大部分が滅失していることが確認された。ただし、掘削坑の直下において、墓坑の底付近の可能性のある土層が僅かに残っており、その形状の一部を確認した。本調査の目的及び保護の観点から、それ以上の掘削は行わなかった。

10月6日までに、調査区の図面作成、写真撮影を終了し、10月7日に空撮を行った。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点より、大規模な現地説明会は実施せず、10月23日（土）に地元説明会を開催し、地元関係者をはじめ約40名の参加を得た。

その後、10月27日までに調査区の大半を掘削土による土嚢で埋め戻し、表面の10～15cmを旧土で埋めた。

(令和元年度 試掘調査)

団 長：並河 清次

調 査 員：廣瀬 正嗣（養老町教育委員会事務局生涯学習課学芸員）

調査参加者：鵜飼 芽依・中野 秀昭・安福 隆司

事 務 局：西脇 直樹（養老町教育委員会事務局生涯学習課課長）

中島 和哉（養老町教育委員会事務局生涯学習課係長）

調査協力者：赤塚 次郎・小野木 学・早川 万年

(令和2年度 範囲確認調査)

団 長：森島 恵照

調 査 員：廣瀬 正嗣（養老町教育委員会事務局生涯学習課学芸員）

調査参加者：鵜飼 芽依・中野 秀昭・長澤博千代・安福 隆司

事 務 局：小里 克昌（養老町教育委員会事務局生涯学習課課長）

中島 和哉（養老町教育委員会事務局生涯学習課課長補佐）

調査協力者：宇野 隆夫

(令和3年度 発掘調査)

団 長：森島 恵照

調 査 員：廣瀬 正嗣（養老町教育委員会事務局生涯学習課学芸員）

調査参加者：加納 昭和・高木 すみ江・竹中 絹江・中野 秀昭・長澤博千代・安福 隆司

事 務 局：西脇 直樹（養老町教育委員会事務局生涯学習課課長）

田中 聡美（養老町教育委員会事務局生涯学習課係長）

調査協力者：赤塚 次郎・小野木 学・小林 新平・中島 和哉

第 2 章

千人塚 1 号古墳の立地と歴史的環境

1 千人塚 1 号古墳の位置と周辺の遺跡

千人塚 1 号古墳は岐阜県養老郡養老町養老に所在する。本地域は岐阜県の南西部に位置し、滋賀県や三重県とも境を接している。西方には、伊吹山地と鈴鹿山地及び養老山地が南北に隣接して狭い地峡帯を形成しており、ここに位置する関ヶ原は、古くより東西交通及び軍事の要衝であった。この地峡帯を東に抜けて濃尾平野に至るには、南宮山の北から不破郡垂井町に向かうルートか、南宮山の南から大垣市上石津町を



千人塚 1 号古墳近景（南東から）

通過し、養老郡養老町へ向かうルートを通す必要がある。この二つのルートには、現在でも J R 東海道線や新幹線、名神高速道路、国道 21 号線といった主要交通機関が集中している。

また、千人塚 1 号古墳が造られた古墳時代には、現在の地形環境とは異なり、養老町付近まで旧伊勢湾が入りこんでいたと推定されている*。さらに濃尾平野の東高西低の地盤運動から、揖斐川をはじめとする様々な河川が西へ流れ込んでいたと想定できる。そのため当地は陸路だけでなく、海運や河川交通においても重要な拠点となっていただろう。

養老町の山間部では、象鼻山古墳群をはじめ、桜井古墳群、竜泉寺古墳、喜勢古墳群、柏尾 1・2 号古墳など、複数の古墳が分布調査により確認されている（第 2 図）。中でも、南宮山の一支脈である象鼻山に所在する象鼻山古墳群は、弥生時代後期から古墳時代前期を中心に山中を大規模に造成し、一斉に計画的な造墓を進めた稀有な遺跡であり、その後、古墳時代中期後半以降に造墓活動を再開したことが明らかとなっている**。一方、養老山地の麓に所在する古墳については、滅失や未調査のものが多く、詳細が明らかなものは少ないが、桜井古墳群において横穴式石室より 5 体の人骨が出土した記録が残っている***。

平野部においては、日吉遺跡をはじめ、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした散布地が複数確認されており、中でも、郷勾遺跡や明德遺跡では、古墳時代中期後半～後期頃の須恵器が採集されている。

* 高橋 学 1997「地形環境の復元」『大垣市遺跡詳細分布調査報告書―解説編―』

** 中島和哉編 2015『象鼻山古墳群発掘調査総括報告書』養老町教育委員会

*** 村上弁二 1971「桜井古墳」『養老町の文化財』第 1 号



【墳墓】

- 象鼻山古墳群 (前方後方墳、上円下方壇他 68 基の墳墓群)
- 桜井古墳群 (横穴式石室をもつ群集墳、消滅)
- 竜泉寺古墳 (横穴式石室をもつ墳墓、一部損壊)
- 喜勢古墳群 (円墳他 5 基の墳墓群)
- 柏尾1・2号古墳 (円墳)
- 白石古墳 (詳細不明)
- 千人塚古墳群 (円墳他 4 基の墳墓群)

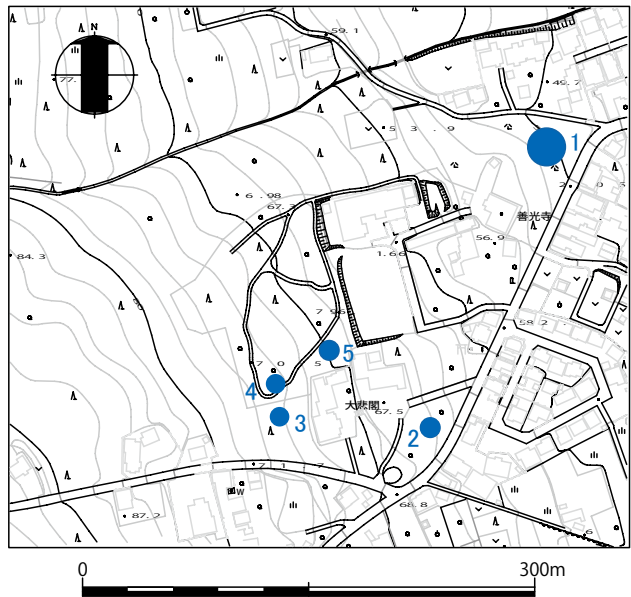
【散布地等】

- 日吉遺跡 (弥生時代から中世の散布地)
- 郷勺遺跡 (古墳時代から中世の散布地)
- 桜池遺跡 (弥生時代から古墳時代の散布地)
- 井ノ下遺跡 (古墳時代から中世の散布地)
- 高田遺跡 (古墳時代から中世の散布地)
- 明德遺跡 (弥生時代から中世の散布地)

第2図 千人塚1号古墳の位置と周辺の遺跡 (国土地理院 1/25000 大垣・養老から)

2 千人塚1号古墳の立地と構成

千人塚1号古墳は、養老山地に形成された標高約50mを測る下位段丘面に立地している。周囲に点在する数基の古墳と併せて、千人塚古墳群と総称されており、古い報告によれば12～13基からなる古墳群であったようであるが*、平成14～18年度にかけて養老町教育委員会が実施した遺跡分布調査では、5基の確認にとどまっている**。千人塚古墳群周辺は、大正～昭和初期にかけて、養老公園の玄関口として発展した地域であり、それに伴い小古墳は滅失してしまった可能性が高い。



第3図 千人塚古墳群の立地と構成

千人塚1号古墳から南へ200m程に立地する2号古墳の墳頂部には、「当芸野」と刻まれた標柱が建てられており、古事記に記述がある、古代の英雄ヤマトタケルノミコトが伊吹山の神に打ち惑わされ大和へ帰る道中に、「吾が心、恒に虚より翔り行かむと念ひつ。然るに今吾足得歩まず、たぎたぎしくなりぬ。」と宣ったことに由来する、当芸野の候補地と考えられている***。

また、続日本紀には、717年に女帝・元正天皇が当地へ行幸され、美泉の若返りの効果に感銘を受け、当時の元号を霊亀から養老へ改元した、いわゆる養老改元の記述があるが、現在その存在が明らかな古墳群としては、千人塚1号古墳を含む千人塚古墳群が、養老改元の舞台である養老の滝に最も近い古墳群と言えるだろう。



第4図 千人塚1号古墳鳥瞰図

* 橋崎彰一 1972「古墳時代」『岐阜県史通史編原始』
 ** 中島和哉編 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』養老町教育委員会
 *** 岐阜県地方改良協会養老郡支会 1925『養老郡志』

第 3 章 発掘調査の成果

1 調査前の知見

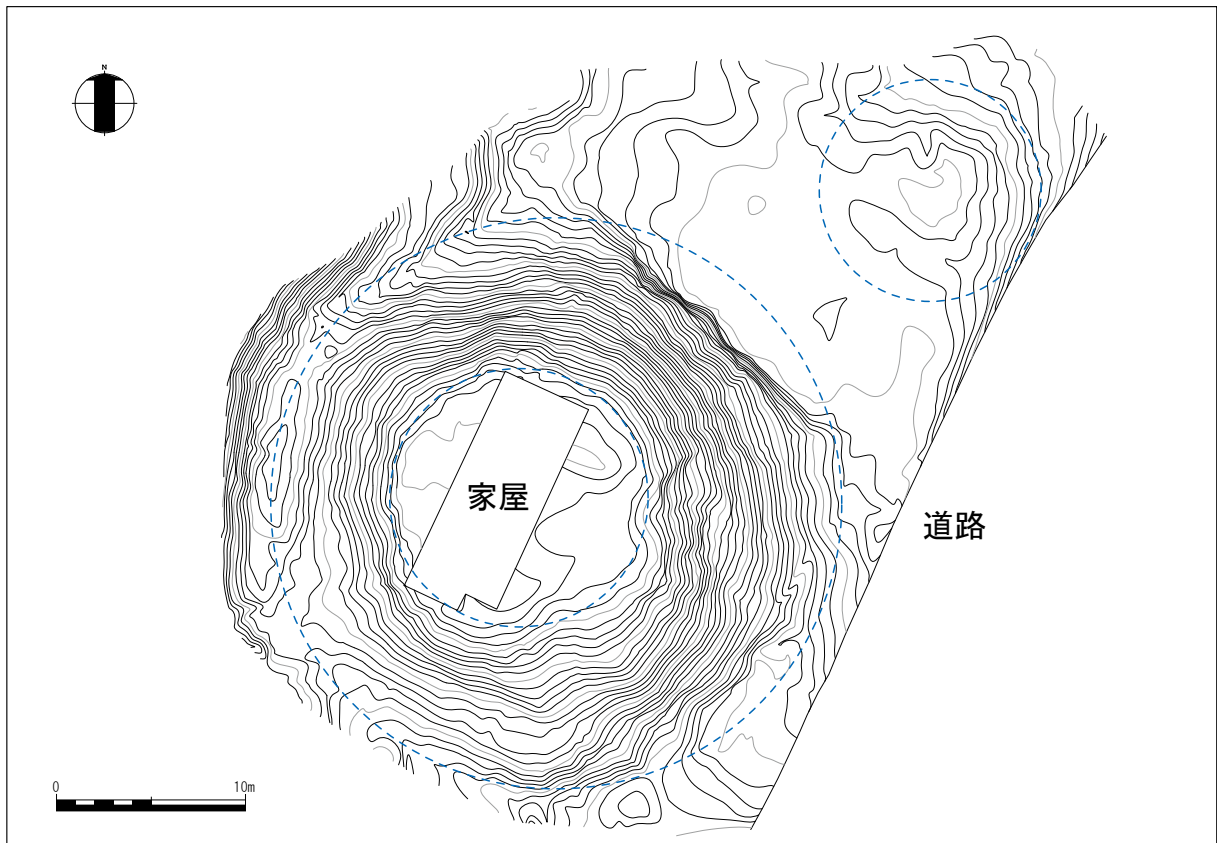
平成 14 ～ 18 年度にかけて養老町教育委員会が実施した遺跡分布調査では、千人塚 1 号古墳は、全長 25 m の円墳であり、現地表面の観察からは周溝を持つ可能性が指摘されている*。また、墳頂部にある廃墟となった家屋の近くでは、須恵器の甕を 1 片採集できているが、古代に属するものであり、千人塚 1 号古墳の時期を示す可能性は低いと考えられている。

このほか、『養老郡志』には、千人塚古墳群の中の一つと思われる円墳において、明治中頃に地元住民数名が墳頂中央部を掘削し、石室を確認したが副葬品等は見つからず、その代わりに大日如来を象った石仏が一体出土したことから、それ以前に盗掘を受けていた可能性があることが報告されている**。これが、千人塚 1 号古墳か、またはその他の滅失した古墳かは詳しく検証する必要があるだろう。

以上から、当古墳は、周溝を伴う可能性が高いが、時期を示すような遺物は確認できておらず、築造時期は不明であった。それは、古墳群全体を見ても同様であるが、少なくとも当古墳群の中に石室を持つ円墳が存在する・していた可能性がある。

こうした調査前の知見に基づき、令和元年度から令和 3 年度にかけて試掘調査、範囲確認調査及び家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査を実施した。その結果、千人塚 1 号古墳は、葺石や周溝、円筒埴輪を伴う、5 世紀後半頃に築造された全長 35 m の円墳であることが明らかとなった。また、墳丘完成以降かつ墳頂の家屋建設以前に、古墳の中心部が大きく掘削を受けており、埋葬施設がほぼ滅失していることが判明した。その他、千人塚 1 号古墳の北東側に確認されていた低いマウンド状の地形が、これまで未確認の新規古墳（6 号古墳）であることが新たに判明した。これらの成果は以下に示すとおりである。

* 中島和哉編 2015 『象鼻山古墳群発掘調査総括報告書』養老町教育委員会
** 岐阜県地方改良協会養老郡支会 1925 『養老郡志』



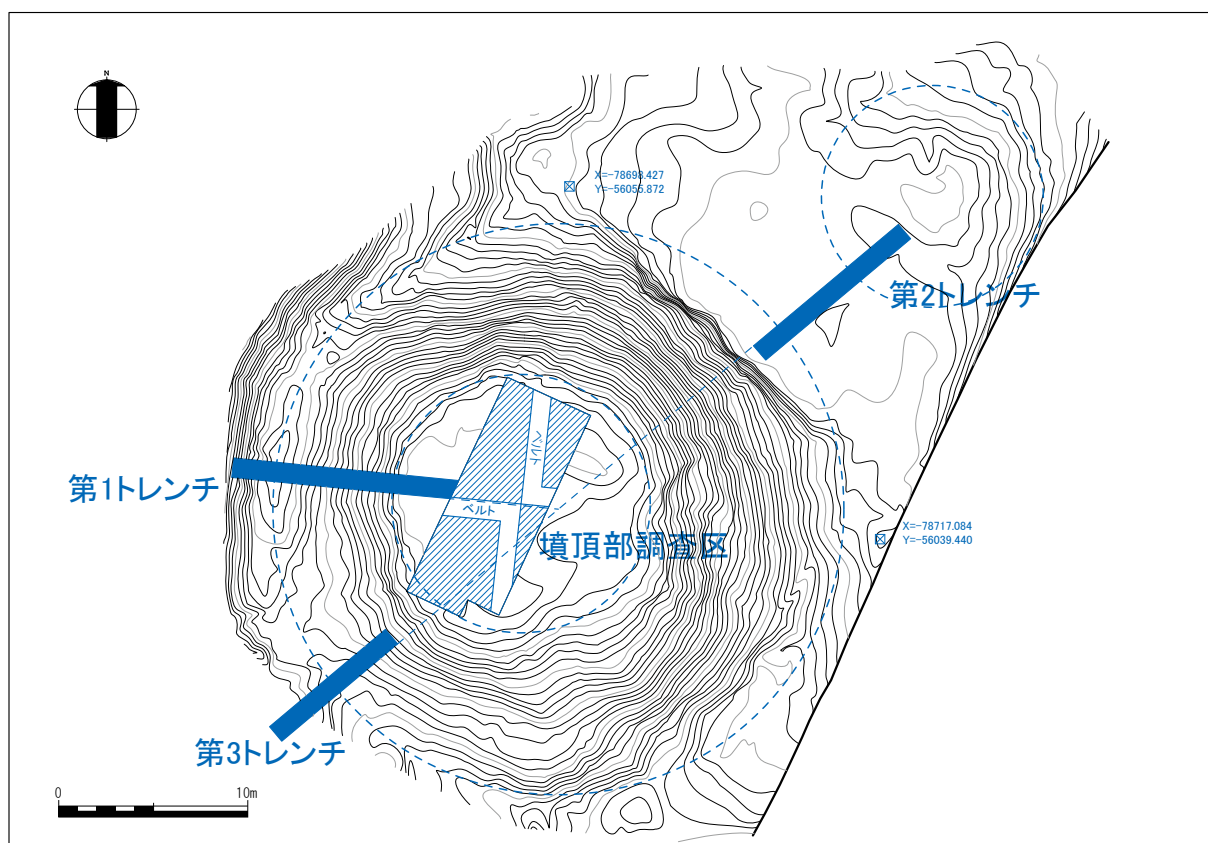
第5図 千人塚1号古墳測量図 (S= 1/400)

2 調査の方法

令和2年度の範囲確認調査では、令和元年度の試掘調査成果とあわせて、千人塚1号古墳の規模、構造、年代を確定することを目的とした。調査に伴い、墳丘裾部に計3本の調査トレンチを設定した（第6図）。各トレンチの関係を整理すると、墳形を確定するために第1トレンチ（長さ12m×幅1m）を、古墳の全長を確認するために、第1トレンチから南へ45°振った位置に第3トレンチ（長さ9m×幅1m）を、墳丘中心を通る第3トレンチの同一延長軸上に第2トレンチ（長さ10m×幅1m）を設定した。第1トレンチについては、墳頂部にある家屋の基礎構造を確認するため、最終的に墳丘上面まで延長している。また、第2トレンチについては、1号古墳の北東側で確認されている低いマウンド状の地形も調査対象となるよう設定した。

令和3年度の発掘調査では、家屋建設等による墳頂部及び埋葬施設への影響の有無の確認を目的とした。よって、墳頂部の家屋が建っていた範囲を調査区とし、調査区内に記録用の十字セクションベルトを設定した（第6図）。十字セクションベルトの中心は、調査区ではなく、墳丘上面の中心となるよう設定し、十字セクションベルトの東西方向が第1トレンチ南壁の延長軸上となるよう設定を行った。

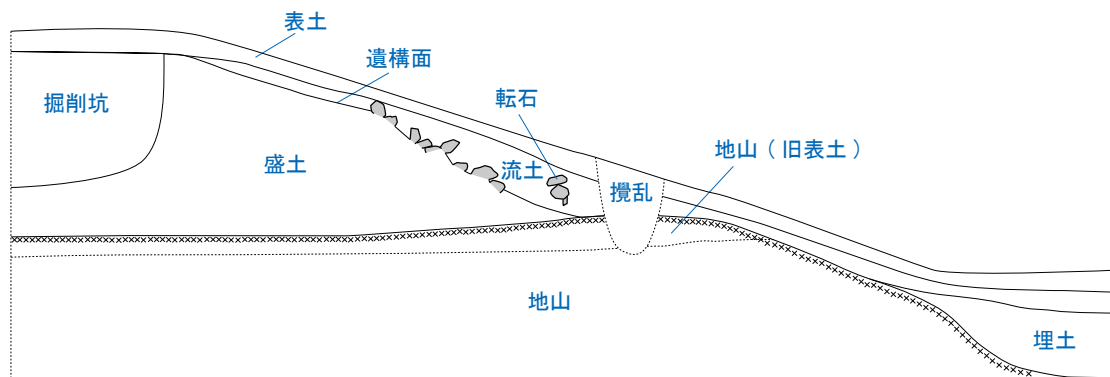
調査成果の実測には、世界測地系を用いた。基準観測点は、千人塚1号古墳の墳丘東裾と岐阜県道96号大垣養老公園線の間に設置した国土座標 $X=78717.084, Y=-56039.440$, 標高 49.058 及び、墳丘北裾と民地の間に設置した国土座標 $X=78698.427, Y=-56055.872$, 標高 49.430 の3級基準点である。



第6図 範囲確認調査トレンチ及び墳頂部発掘調査区位置図（S=1/400）

3 基本層序

基本層序は、腐植土である表土、墳丘から流出した土や転石した礫を含む流土、墳丘の築造に伴い人為的に移動された盛土、墳丘築造以前の堆積土からなる地山である（第7図）。これに、墳丘築造後に人為的な移動や植物の生痕によって形成された攪乱と、広義には攪乱であるが古墳の内容物を目的としたと思われる主体部の人為的な改変により形成された後世の掘削坑、墳丘築造時の地形改変により地表下に埋没した旧表土を加えた。



第7図 層序分類模式図

4 範囲確認調査

(1) 構造について

これまでの調査により、千人塚1号古墳は、全長約25mを測る円墳であると考えられている*。地形測量図による所見からも、墳丘の北東端が削平を受けており、やや不定形を呈しているが、円墳の可能性が高いと判断した(第5図)。また、千人塚1号古墳の北東側約5mの位置には低いマウンド状の地形が観察されており、古墳と関連する地形の可能性はある。

以上の知見を踏まえ、千人塚1号古墳の調査区を設定した。調査区の設定は、墳丘周囲に民家や私有地が隣接していることや、東側に主要地方道が通っていることから、大きく制約を受けたが、古墳の形態、規模、構造、築造時期についてなるべく多くの情報を得ることができるよう設定を行った(第6図)。

具体的には、第1トレンチが墳丘の形態及び構造、第2・3トレンチが墳丘の規模について情報を得ることを主な目的としている。また、第2トレンチは、北東側に隣接する低いマウンド状の地形についても情報を得られるよう設定している。なお、範囲確認調査ではあるが、第1トレンチについては、墳頂部にある家屋の基礎埋設状況の確認も併せて行うため、墳頂部まで調査区を延長している。

【第1トレンチ】(第8図)

千人塚1号古墳墳丘のうち、最も遺存状態が良く、長い調査トレンチが設定できる西側の墳丘斜面を中心に、試掘調査トレンチとして設定した調査区であり、長さ8.0m、幅1.0mを測る。また、範囲確認調査により調査区の東側に長さ4.0m、幅1.0mの拡張を行い、墳頂部にある家屋の西壁基礎まで調査が及ぶよう再設定を行ったため、最終的にその長さは12mに至っている。

表土(1層)と流土(5～9層)の厚さは10cm～2.0mあり、その除去を行ったところ、調査区東端から西へ4.0～5.2mの範囲の流土(7・8層)直下において、直径15～30cmの礫群が確認され、これを葺石と判断した。7・8層からは転石に混じり埴輪が102片出土したが、その大半は葺石範囲より下側(西側)で集中的に確認され、葺石範囲内では10片の確認にとどまった。埴輪片が集中的に出土した範囲のすぐ西側にあたる、調査区東端から西へ5.8～7.2m地点では、やや平坦を成す、テラス状の墳丘形が確認されており、ここに埴輪列が配置されていた可能性が想定できたが、同位置には長さ1.0m、幅1.0m以上、深さ0.9mに及ぶ攪乱があり、埴輪列の位置については明確にできなかった。この攪乱の性格は明らかでないが、埴輪の抜き取りを目的とした掘削である可能性を指摘しておきたい。なお、葺石が敷かれている17層直上を墳丘面と判断した。

次に、調査区東端から西へ8.5m～調査区西端までの流土(8・9層)直下では、埴輪片を含む黒色砂質土(10層)が確認され、周溝の埋土と判断した。埴輪片は全て10層最深部から出土したが、その下層であり、地山(23層)に類似した11・12層からは出土していないことから、墳丘完成

* 中島和哉編 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』養老町教育委員会

後の早い段階に 11・12 層が溝へ流れ込み、一定の時間が経過した後、墳丘上に立ち並んでいた埴輪が転落し、10 層と共に溝を埋没させたと考えた。周溝の西端は調査区外へ続くため、溝の幅は明らかにできなかった。周溝埋土(10～12 層)除去後に検出された明褐色砂質土～粗砂層(23 層)を地山と判断し、周溝より東側の流土(8 層)直下においては、墳丘面として機能していたと考えられる。

さらに、調査区中央部の流土(7・8 層)直下では、先述したテラス状の墳丘形を確認しており、これを形成する黒色砂質土のしまりの強い土層(22 層)について、その性格を明らかにするため断ち割りを行った。その結果、22 層は遺物を含まず、ほぼ水平堆積しており、土層が直下の地山(23 層)へ漸移する様子が観察されたことから、墳丘築造以前の土壌化した旧表土である可能性が高いと判断した。調査区東端から西へ 6.6～7.2 m 地点においては、墳丘面としても機能していたと考えられる。

続いて、墳頂部にある家屋の基礎埋設状況の確認のため、墳頂部まで調査区を延長したところ、調査区の西壁においてコンクリート及び碎石が深さ 30cm 程度まで埋設された土層(2 層)を確認し、家屋建設時の基礎工事による攪乱と判断した。また、表土と流土の除去後、墳丘面である 13・14・17・19 層の上面から埴輪片が出土しなかったことから、墳頂部では埴輪を用いていない可能性が高い。なお、墳丘面と判断した 13 層を削るように掘り込む 4 層については、墓坑に係る遺構の可能性も考慮したが、後の家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査により、家屋建設時の攪乱と判断している。また、調査区中央部において墳丘築造以前の旧表土である可能性が高いと考えた 22 層について、その確証を得るため、同層が確認できる深さまで断ち割りを行った。その結果、調査区東端から西へ 3.0 m 付近の墳頂部においても、調査区中央部とほぼ同一の標高地にて 22 層を確認することができた。正確には、22 層は調査区東側の墳頂部側に向かって緩やかに傾斜しており、墳丘周辺の自然地形も西から東へ傾斜していることから、22 層が墳丘築造以前の旧表土である可能性が非常に高まった。

層位観察からは、調査区東端から西へ 0.9～3.5 m の範囲に土塁状の高まり(19 層)を確認した。そして、13～18 層が土塁状の高まりを端緒とし堆積していることから、これらの土層を盛土と判断した。20・21 層については、葺石を掘り下げておらず、土層の繋がりが明確ではないが、旧表土(22 層)を基準に、より上層のため盛土と考えた。

以上の調査成果から、千人塚 1 号古墳は葺石・周溝・埴輪を備えた古墳であることが明らかとなった。周溝の西端が調査区内では確認されなかったことから、その幅は明らかではないが、調査区の西端付近において周溝の底形が平坦となることから、古墳の墳端は調査区外の比較的近い地点で検出できる能性が高い。また、葺石・周溝間の墳丘斜面中に、幅約 1.5 m のテラス状の墳丘形が確認され、墳丘は二段築成である可能性が高い。そのうち一段目は地山を削って形成しており、二段目は盛土による形成であることを確認した。さらに、攪乱の影響により明確ではないが、葺石より上部(東側)から墳頂部での埴輪利用の痕跡が見つかからないこと、埴輪片が集中的に出土する地点に隣接することから、埴輪列の位置がこのテラス部分である可能性が高いと考えた。



完掘状況（北東から）



埴輪出土状況（南東から）

54.0 —

53.5 —

53.0 —

52.5 —

52.0 —

51.5 —

51.0 —

50.5 —

50.0 —

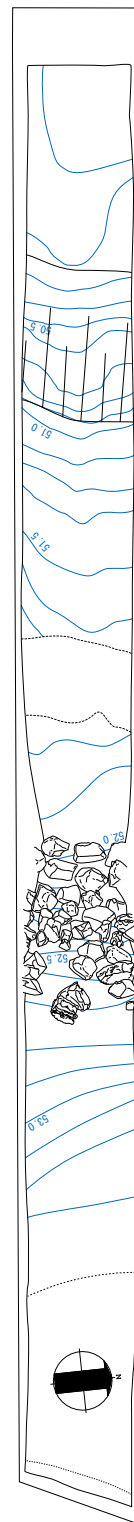
49.5 —

第8図 第1トレンチ実測図（S=1/60）



【埴石立面図】

【南壁断面図】



【平面図（墳丘完成後）】

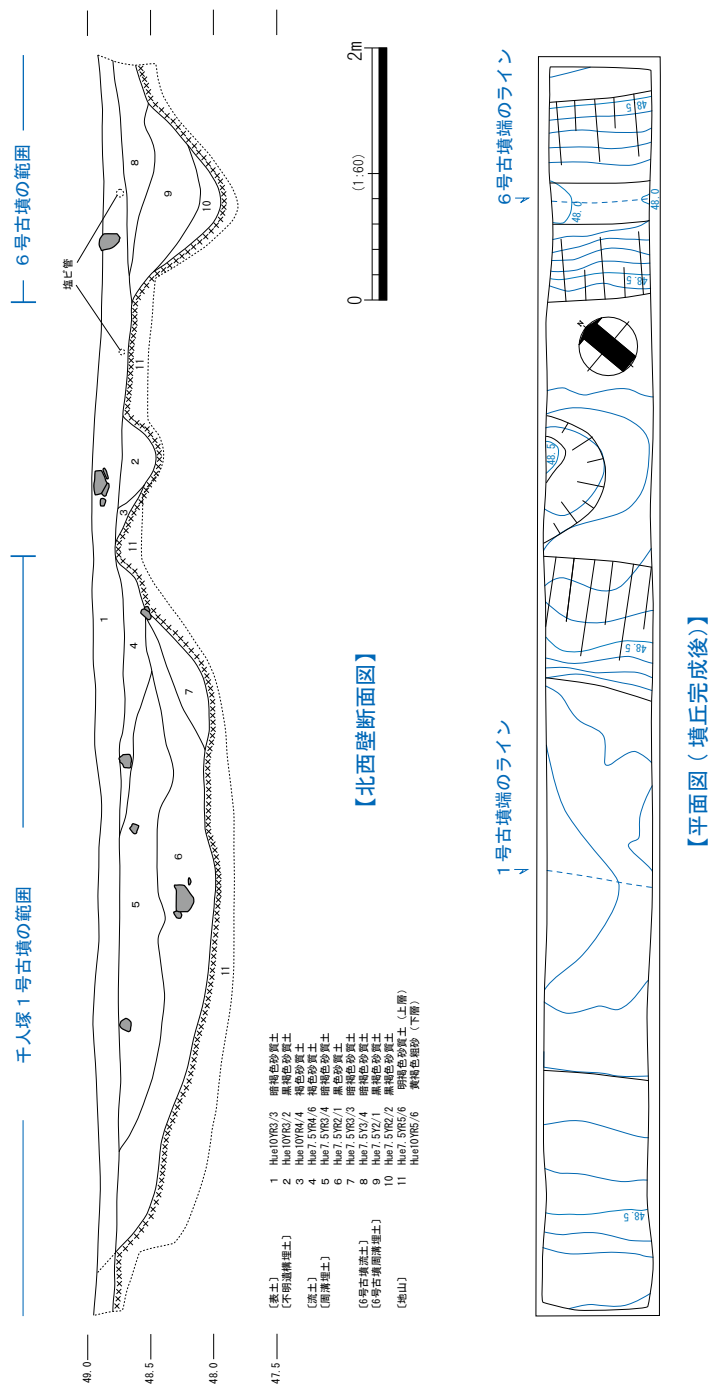
【第2トレンチ】（第9図）

千人塚1号古墳墳丘の北東側に設定した調査区であり、長さ10.0 m、幅1.0 mを測る。地形測量図によれば、墳丘の北東端が削平を受け、平坦面を呈しているが、周溝が遺存していればその外端が確認できる可能性が高い。また、墳丘の北東側約5 mの位置に低いマウンド状の地形が観察されており、その関連性についてもあわせて確認できることから、当該位置に設定を行ったものである。

表土（1層）は15～20cmの厚さである。同層は、周辺が削平され、平坦に造成された際の整地層である。塩ビ管や鉄管が同層内を這っていることから、整地された時期は近現代と考えられる。次に、調査区南西端から北東へ0.5～5.5 mの表土直下において、暗褐色～黒色砂質土（5～7層）を呈す周溝埋土を検出した。全て破片ではあるが、5層からは2片、6層からは40片の埴輪片が出土している。周溝埋土直上に一部堆積している4層は、第1トレンチの9層と近似していることから、流土と判断した。また、当初の予想通り周溝の外端を捉えることはできたが、墳丘側は削平により消失しており、正確な幅は明らかにできなかった。溝の残存幅は5.5 mを測り、周溝の底形は比較的なだらかではあるが、中央付近に最深部が確認でき、これを北東側の墳端と考えた。表土と周溝埋土の除去後、明褐色砂質土～粗砂層（11層）が検出され、第1トレンチ同様に、地山と判断した。

さらに、調査区南西端から北東へ8.0～9.5 mにおいて、幅狭の溝が検出され、測量調査により低いマウンド状の地形が確認されていることから、1号古墳とは異なる古墳の周溝と考えた。この周溝は幅1.5 mを測り、断面形がV字を呈す溝の中央最深部が南西側の墳端である可能性が高い。その周溝埋土（9・10層）のうち、9層からは埴輪が2片、須恵器の甕が1片出土したが、いずれも細片である。

以上の調査成果から、第2トレンチにおいても第1トレンチ同様に周溝が検出され、その外端を確認することができた。墳丘側の端が消失しており、正確な周溝幅については明確ではないが、周溝の中央付近最深部に墳端を充てた。また、1号古墳周溝の外側に周溝を伴う別の古墳を確認した。過去に行った遺跡分布調査では5号古墳までの確認にとどまるため、当古墳を新規確認の千人塚6号古墳とした。調査区周辺が近現代に整地されていることもあり、1号古墳と6号古墳の切り合いは確認できず、その前後関係は明らかにできなかった。なお、1号古墳と6号古墳の間に遺構を検出しているが（2・3層）、範囲が調査区外へ続き、遺物も確認できなかったことから、その性格については明らかにできなかった。



北西壁断面（東から）

完掘状況（北東から）

6号古墳周溝（南東から）

第9図 第2トレンチ実測図（S=1/60）

【第3トレンチ】(第10図)

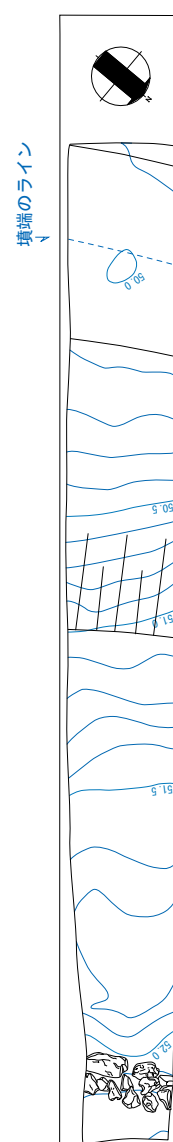
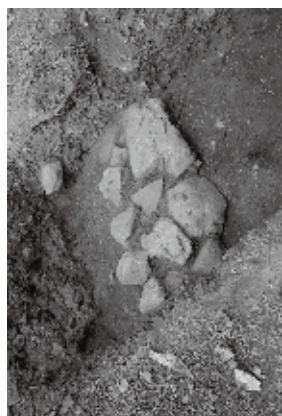
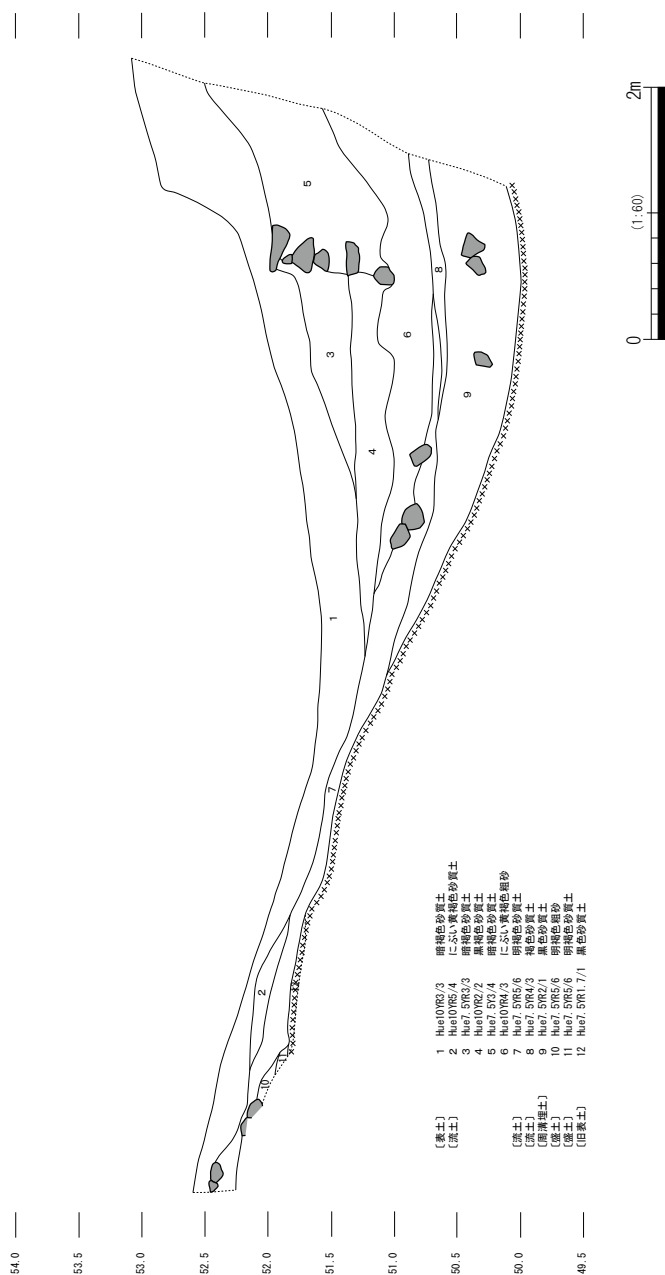
千人塚1号古墳墳丘の南西端を中心に設定した調査区であり、長さ9.0 m、幅1.0 mを測る。第2トレンチと併せて、墳丘規模についての情報を得ることを重視して、墳丘中心を通る同一延長軸上に設定した。

表土(1層)の厚さは10～80cmである。表土を除去すると、調査区南西端付近において隣地の造成に伴う石垣や土盛(5層)及び、それに起因する流れ込みの土層(3・4層)を確認した。また、その下層にあたる6層も土盛形成以前の隣地からの流れ込みと判断した。以上の隣地造成に伴う土層(3～6層)の厚さは最大1.5 mに及び、その直下に10～30cmの厚さをもつ墳丘流土(2・7・8層)を確認した。

流土除去後、調査区北東側から南西へ0.4～0.7 mにおいて、直径15～30cmの礫群が確認され、葦石と判断した。また、調査区北東側から南西へ1.1～2.2 mの範囲において、黒色砂質土のしまりの強い土層(12層)を検出し、墳丘築造以前の土壌化した旧表土と判断した。また、12層上面はテラス状の墳丘形を呈しており、第1トレンチの調査結果により、墳丘面と考えられることから、葦石直下の10・11層は盛土と判断できた。12層直上の流土(7層)からは埴輪が4片出土しているが、全て葦石範囲に近い地点で確認された。

続いて、調査区北東側から南西へ4.1 m～調査区南西端までの流土直下において、埴輪片を含む黒色砂質土(9層)が確認され、周溝の埋土と判断した。周溝の南西端が調査区外へ続いており、溝の幅は明らかにできなかったが、調査区北東側から南西へ7.1 mにおいて周溝最深部を確認することができ、これを南西側の墳端と判断した。周溝埋土からは、25片の埴輪が出土している。周溝埋土直下の明褐色砂質土(13層)が地山であり、周溝より北東側の流土(7層)直下においては、墳丘面として機能していたと考えられる。

以上の調査成果から、第3トレンチにおいても第1・2トレンチと同様に、周溝を検出することができ、その形態から円墳の可能性が非常に高まった。また、周溝の南西端が調査区外へ続いていことからその幅は明らかではないが、周溝最深部が確認できており、これを南西側の墳端に位置づけた。第2トレンチの墳端との直線距離は35.0 mを測り、これが古墳の全長と考えられる。さらに、第1トレンチと同様に葦石を検出したが、同トレンチで検出された葦石よりも明らかに幅狭であった。これには、当調査区が墳丘の裏側であるなど、地形的な要因が関係している可能性が高い。葦石・周溝間の墳丘斜面中に、土壌化した旧表土により形成された幅約1.0 mのテラス状の墳丘形も確認された。流土より出土した埴輪片は少量ではあるが、全てこのテラス部分付近からの確認であるため、第1トレンチの埴輪列の想定位置と矛盾しない。



(2) 出土遺物について

第1～3トレンチから出土した遺物は、埴輪 149 片、近世陶器 1 片、瀬戸美濃 1 片、須恵器 1 片、不明土器 6 片である。この内、接合によって形態を復元できた埴輪片 24 点を図示した。全て円筒埴輪であり、その出土位置は、1～5・7・8・10～12・15 は第1トレンチの墳丘流土、6・9・13 は第1トレンチの周溝埋土、3 は第1トレンチの攪乱、16～21 は第2トレンチの周溝埋土、22～24 は第3トレンチの周溝埋土である。以下、部位毎に詳述する。

口縁部 (第11図 1～3)

1 は復原口径 20.2cm。直立する口縁部形状を持つと思われる。外面調整の残りは良好でないが、若干のタテハケが認められる。2 は復原口径 21.6cm であり、3 は復原口径 24.2cm である。共にやや外反気味ではあるが直立した口縁部形状を持つ。外面調整の残りは不良であり、観察できない。いずれの資料も黒斑はない。

胴部 (第11図 4～19・22～24)

ほとんどの資料が突出度の低い低平形の突帯をもつ。また、風化のため外面調整が観察できる資料は少ないが、そのほとんどがタテハケである。ただし、9・10・16・17 はやや M 字状を呈す台形の突帯をもち、中でも 10 は唯一外面調整にヨコハケが観察される。これは、二次調整に工具を器壁上で停止させながら施すように見える連続的なヨコハケであり、「B 種ヨコハケ」と総称されるものである。また、B 種ヨコハケは、突帯間隔に対する工具の幅や静止痕の傾き等により細分されるが*、10 のヨコハケの静止痕はやや傾くことから B d 種に細分される可能性がある。いずれの資料も黒斑はない。

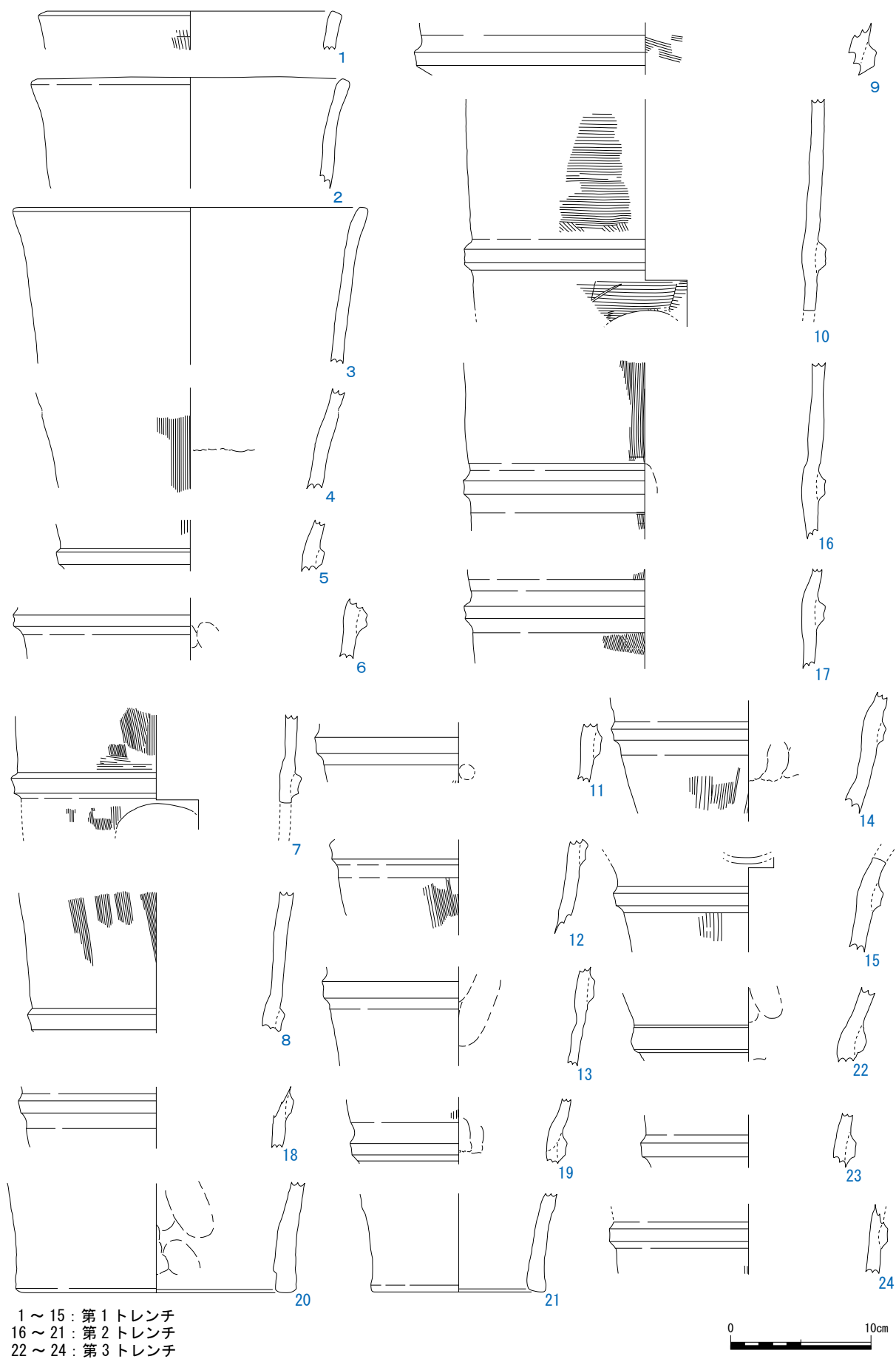
底部 (第11図 20・21)

20 は復原底径 19.0cm。外面は風化が激しく調整の残りは観察できない。器壁は比較的厚く、内面のユビナデが顕著に残る。21 は復原底径 12.2cm。20 と同様に外面の風化が激しく調整は不明である。いずれの資料も黒斑はない。

以上、図化できた資料は全て円筒埴輪の細片であり、風化の激しい資料が多いため、時期決定に足る資料は十分だとは言えないが、①黒斑を持たない窖窯焼成であること、②突帯の突出度が低いこと、③外面調整はタテハケが主流ではあるが、B 種ヨコハケをもつものがあり、中でも新しく位置付けられる B d 種ヨコハケに分類できる可能性があること、以上の点から、酒井が提唱した美濃の円筒埴輪編年のうち V 期古段階に位置づけられる可能性を示しておきたい**。須恵器編年では TK23・47 型式期併行、実年代では古墳時代中期後半の 5 世紀後半頃の資料と想定できる。

* 一瀬和夫 1988 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大木川改修に伴う発掘調査概要 V』大阪府教育委員会

** 酒井将史 2018 「美濃の円筒埴輪の編年と画期」『東海の埴輪 ―出現と終焉、地域性を探る―』第 31 回考古学研究会東海例会



第11図 千人塚1号古墳出土埴輪実測図 (S=1/4)

(3) 小結

第1～第3トレンチの発掘調査の結果、千人塚1号古墳は全長35.0 mを測る、円墳であることが明らかとなった(第12図)。また、墳丘斜面途中に幅1.0～1.5 mのテラスが確認されたことから、二段築成である可能性が高く、そのうち一段目は地山を削って形成しており、二段目は盛土による形成であることを確認した。一段目の削平面で検出された黒色砂質土層の広がり、墳丘築造以前の土壌化(黒色化)した地山の旧表土と判断した。急峻な養老山地の麓における、黒色土の面的な広がり、注視すべき点である。二段目の盛土については、堤状の高まりを先行して築き、その内側を埋めるように充填することで墳丘を形成していることが明らかとなった。

さらに、千人塚1号古墳は、葺石、周溝を備えており、その流土や埋土から円筒埴輪片が出土した。その出土状況から、円筒埴輪は墳丘完成後に一段目のテラス上に配列された可能性が高いと判断した。また、墳頂部では埴輪は用いられていない可能性が高い。

千人塚1号古墳の築造時期については、出土した遺物が円筒埴輪片のみであり、時期決定に足る資料が乏しく断定は難しいが、円筒埴輪の突帯の突出度が低いことや、Bd種ヨコハケが存在することなどから、古墳時代中期後半の5世紀後半頃としておきたい。

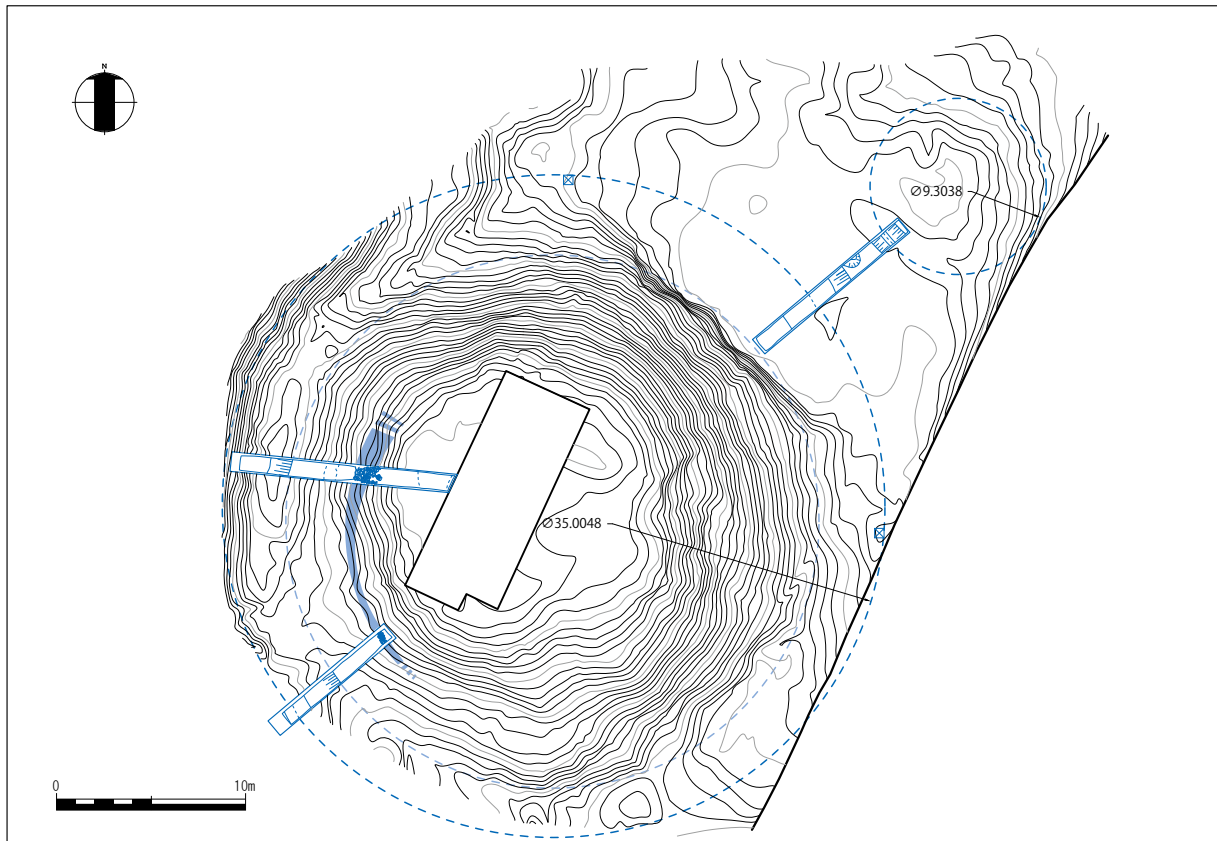
以上の発掘調査の成果をもとに、千人塚1号古墳の形態と規模を示す。

千人塚1号古墳は全長35.0 mの円墳である。墳丘の最高点の標高は、53.5 mである。墳丘最高点と墳端の比高差は、北東側で最も大きく5.5 mを図る。周溝の外端が確認できていない部分があり明確ではないが、周溝外縁の全長は約39.6 mを測ると推定される。最後に、千人塚1号古墳の主要な計測値を再掲しておく。

なお、千人塚1号古墳の北東隣に千人塚6号古墳を新規確認したが、墳形や規模及び、1号古墳との新旧については、今回の発掘調査では明確にできなかった。今後の課題としたい。

千人塚1号古墳主要諸元

形	態：	円 墳	全	長（直径）：	35.0 m
周 溝 内 側 の 全 長：	28.1 m	周 溝 外 縁 の 全 長：	(約 39.6 m)		
墳 丘 最 高 点 標 高：	53.5 m	最 高 点 と 最 低 点 比 高：	5.5 m		



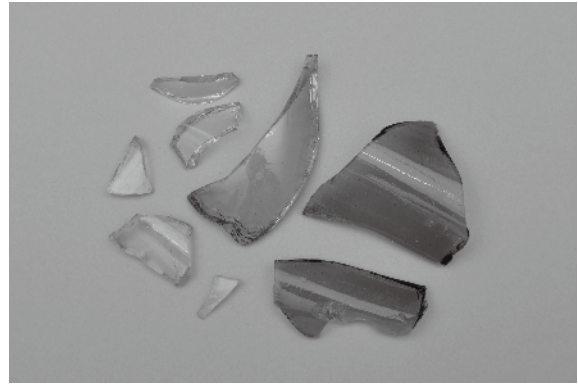
第12図 千人塚1号古墳範囲確認調査平面図 (S=1/400)

5 家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査

(1) 構造について

令和2年度までの調査により、千人塚1号古墳は5世紀後半頃に築造された、全長35.0mの円墳であることが明らかとなった。その評価については第5章にて後述するが、少なくとも養老町においては最大規模の円墳であり、かつ現在確認されている中では唯一の埴輪を伴う古墳として非常に重要性が高いと考えられる。しかし、墳頂部に廃墟となった家屋やその瓦礫が残されたままであり、古墳の保護・活用を検討するためには、この撤去が急務となった。そのため、令和3年度に千人塚1号古墳の墳頂部に残る家屋解体工事が実施され、基礎の撤去工事が完了した後、家屋建設等による古墳墳頂部及び埋葬施設への影響の有無の確認を目的に、家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査を実施するに至った。なお、基礎の撤去工事は古墳への影響が少ないよう人力で行い、工事に伴い立会調査を実施したが、埋葬施設に関連する遺物や遺構は確認できていない。

調査は、家屋建設等による墳丘上面及び埋葬施設への影響の有無の確認を目的とし、墳頂部における家屋の建設範囲全体を調査区として設定した（第6図）。調査区面積は、59.8㎡を測り、調査区内に記録用の十字セクションベルトを残した。十字セクションベルトの交点は、墳丘上面の中心となるよう設定し、また、十字セクションベルト東西方向（以下、東西ベルト）の壁面が第1トレンチ南壁の延長軸上に一致するよう設定を行っている（以下、第13・14図参照）。



4層出土のガラス破片（墳頂部調査区）

家屋は撤去前よりすでに半壊しており、多くの瓦礫が散乱・堆積していたため、調査手順としては、それらの除去から始めた。第1層は、家屋建設及びその半壊に伴う攪乱土であり、その厚さは8～40cmを測る。また、厚さ45cmを測る第2層は、墳頂部の宅地化に伴う攪乱と考えたが、その埋土に多く含有されている直径30～40cmの石は、古墳由来のものである可能性がある。

続いて、調査区中央～南東端において、厚さ80cmを測るややしまりの弱い褐色砂質土が堆積する落ち込み（3層）を確認したため、墓坑の可能性を考慮し、慎重に掘り下げを行った。しかし、その直下の4層中において、近現代のガラス片が複数出土したことから後世の攪乱である可能性が高まった。また、その下層の5層においても埴輪片が3片確認され、通常は墓坑内から埴輪片が検出される可能性が低いことから、3層～5層までは一連をなす攪乱であると判断した。その規模は、中心部において、南北4.0m、東西3.7m以上、深さ1.3m以上、周囲の長さは14m以上であり、家屋の建設に伴うものとは考え難く、その規模や位置から、墳丘完成以降かつ家屋建設以前に掘削された攪乱である可能性が高いと考えた。

当該調査の目的は家屋建設等による古墳主体部及びその埋葬施設への影響の有無の確認であったが、墳丘完成以降かつ家屋建設以前に古墳の主体部が大きく攪乱を受けていることが明らかとなったため、その攪乱の性格及び埋葬施設の遺存状態の確認を目的に、東西ベルト北壁から北へ幅1.0mのサブトレンチを設定し、墳丘の一部断ち割り調査を行った。サブトレンチの掘削深度は、墳丘への影響を考慮し、範囲確認調査において検出した墳丘築造以前の土壌化した旧表土が確認される標高値までを目安とした。

その結果、墳頂から深さ2.0mの地点において、ほぼ同一標高値で面的に広がる墳丘築造以前の土壌化した旧表土を確認し、サブトレンチの底とした。サブトレンチの層位観察によれば、家屋の基礎埋設に伴う攪乱である2層直下より旧表土の20層直上までの7～19層は、墳丘盛土と考えられ、それを大きく削り込むように攪乱である5層が掘り込まれている様子が確認された。墳丘盛土については、おおよそ4回に分けて盛られており、その端緒は、11～13層の土塁状の高まりである。土塁状の高まりの頂点にあたる11層では、黒褐色土と黄褐色土が2～10cmの厚さで相互状に盛土されており、硬くしめることから版築の可能性もあるが、それが明瞭に観察できるのは11層のみであったため、墳丘盛土全体にまで及ぶかは確認できていない。また、5層最深部の直

下において、微量の炭化物を含む、褐色砂質土（6層）を検出し、墓坑に関連する土層の可能性が高いと考えたが、残存する土層の厚さは僅か4cm程度であったため、埋葬施設に関わる有益な情報は確認できなかった。

以上より、千人塚1号古墳の主体部は墳丘完成以降かつ家屋建設以前に大規模な攪乱（3～5層）を受けており、その規模や出土物から、埋葬施設の副葬品などを目当てとした後世の掘削坑である可能性が高いと判断した。6層については、十字セクションベルト南北方向（以下、南北ベルト）の南端から北へ3.0m～4.4mにおいても、5層直下にて僅かに堆積が確認できたが、墓坑埋土の可能性のあることから、面的な掘削確認は行わなかった。

（2）出土遺物について

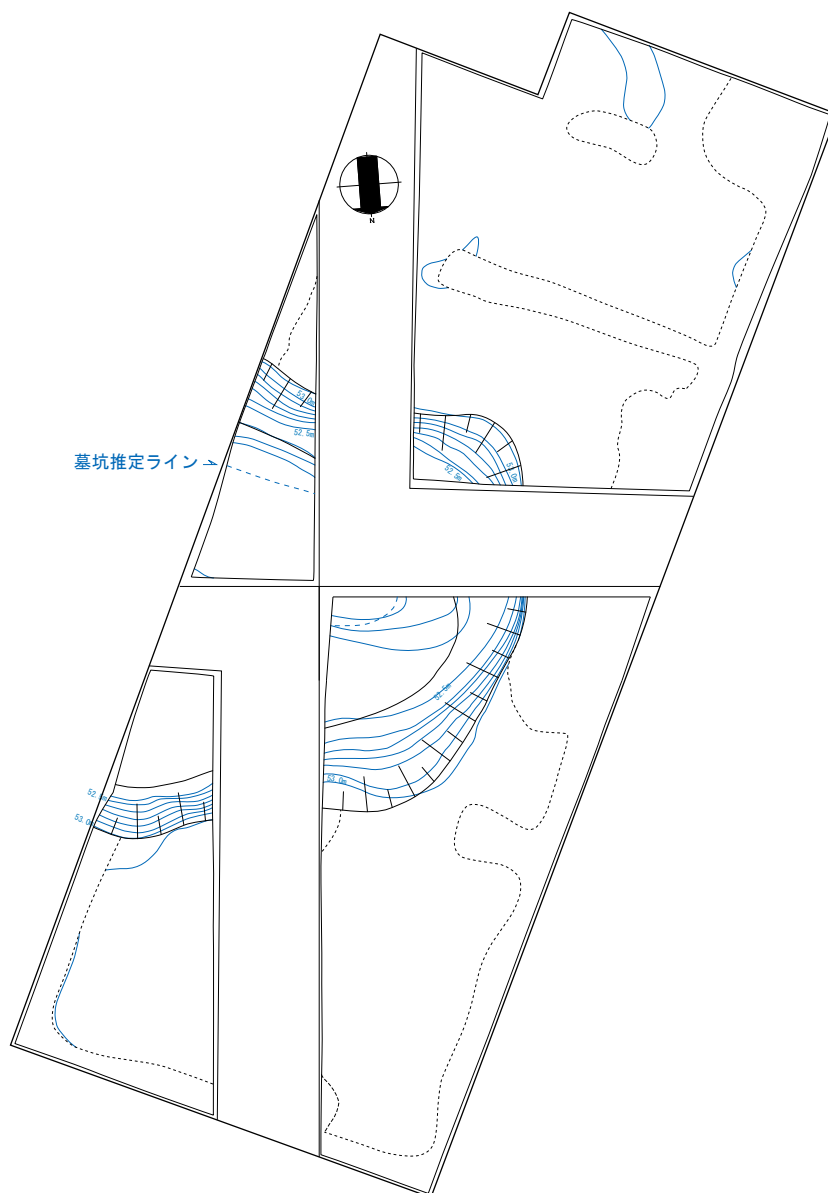
本調査区より出土した遺物は、埴輪5片である。このうち、1層より2片、5層より3片が出土した。いずれも攪乱及び主体部の掘削坑からの出土であり、小片のため図示はできなかったが、その編年位置は、範囲確認調査で出土した埴輪と相違ないものと推察される。

（3）小結

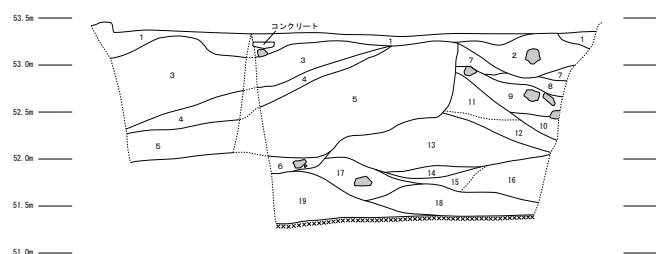
家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査により、千人塚1号古墳は、家屋建設による影響は軽微であったものの、墳丘完成以降かつ家屋建設以前に主体部が大きく掘削を受けており、埋葬施設がほぼ遺存していないことが明らかとなった。確認できている範囲での掘削坑の規模は、南北4.0m、東西3.7m以上、深さ1.3m以上、周囲の長さは14m以上に及ぶが、当該調査の目的及び古墳へのダメージを考慮し、調査区外の掘削確認は行わなかった。

なお、墓坑底部付近の埋土の可能性のある土層が僅かに確認され、その遺存部分は、幅1.5m、長さ2.3m、長軸は東西方向と想定される。埋葬施設については、少なくとも横穴が確認されていないことから竪穴系であり、また、埋葬方法については、掘削坑から大きな石や粘土等が検出されていないことから、石室や粘土槨などの外槨施設を持たない木棺直葬であった可能性がある。ただし、後世の掘削時に持ち出されている可能性もあり、断定はできない。

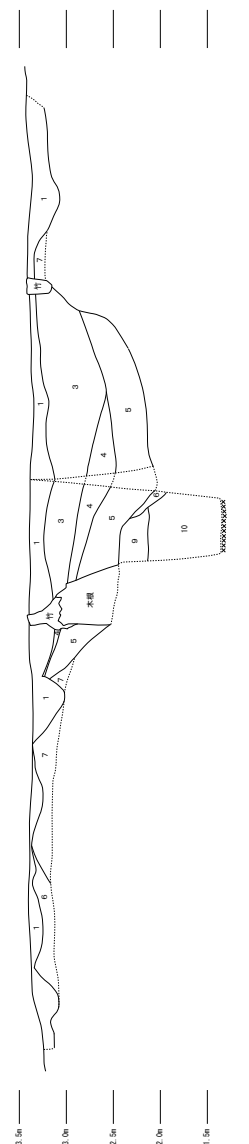
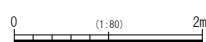
主体部が掘削を受けた時期については、第4章にて考察するが、4層がやや土壌化していることから、宅地化以前は4層までが埋まった状態の坑が残っており、家屋建設に伴う地盤安定化のため3層が比較的短期間で埋められた可能性が高い。



【平面図（墳頂部掘削痕完掘後）】



【中央ベルト東西方向壁断面図】



【中央ベルト南北方向壁断面図】

〔掘削〕	1	Hue10YR4/2	灰黄褐色砂質土
〔掘削〕	2	Hue10YR4/3	にふい黄褐色砂質土
〔盗掘坑〕	3	Hue10YR4/4	褐色砂質土
〔盗掘坑〕	4	Hue10YR3/1	黒褐色砂質土
〔盗掘坑〕	5	Hue10YR4/3	にふい黄褐色砂質土
〔墓坑埋土〕	6	Hue10Y4/6	褐色砂質土
〔盛土 iv〕	7	Hue10YR4/6	褐色砂質土
〔盛土 iv〕	8	Hue10YR3/4	暗褐色砂質土
〔盛土 iv〕	9	Hue10YR5/6	黄褐色砂質土
〔盛土 iv〕	10	Hue10YR4/6	にふい黄褐色砂質土
〔盛土 iii〕	11	Hue10YR2/1	黒褐色砂質土
〔盛土 iii〕	12	Hue10YR4/3	にふい黄褐色砂質土
〔盛土 iii〕	13	Hue10YR4/3	にふい黄褐色砂質土
〔盛土 iii〕	14	Hue10YR4/3	にふい黄褐色砂質土
〔盛土 ii〕	15	Hue10YR2/1	黒褐色砂質土
〔盛土 ii〕	16	Hue10YR3/3	暗褐色砂質土
〔盛土 i〕	17	Hue10YR4/3	にふい黄褐色砂質土
〔盛土 i〕	18	Hue10YR2/1	黒褐色砂質土
〔盛土 i〕	19	Hue10YR4/3	にふい黄褐色砂質土

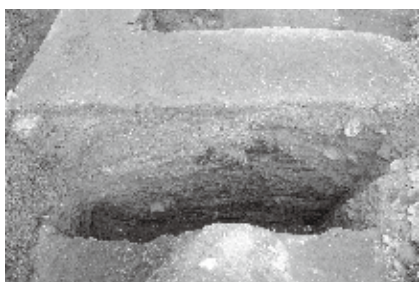
第 13 図 墳頂部発掘調査実測図（S=1/80）



中央ベルト南北方向東壁断面（東から）



中央ベルト南北方向西壁断面（西から）



中央ベルト東西方向北壁断面（北から）



中央ベルト東西方向南壁断面（南から）

第 14 図 墳頂部発掘調査実測図 2

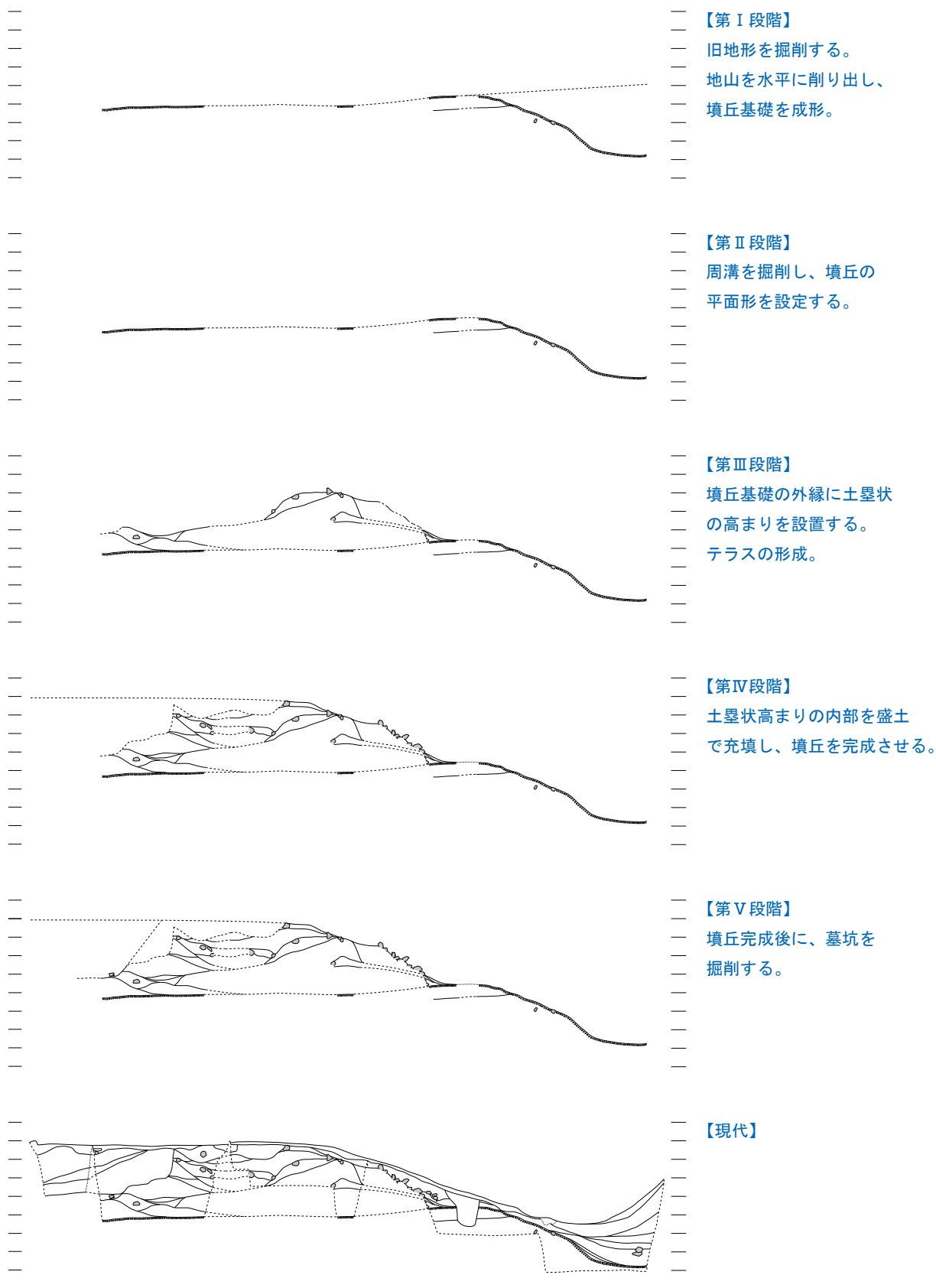
6 千人塚 1 号古墳の築造工程について

範囲確認調査の成果により、千人塚 1 号古墳は、旧地形を掘削した後に盛土を行い、墳丘を完成させた古墳であることが判明している。また、家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査では、主体部が大きく掘削を受けており、埋葬施設がほぼ遺存していないものの、墓坑埋土の可能性のある土層が僅かに確認されている。ここでは、これらの工程を 5 段階に区分し、墳丘築造工程の復元を行った（第 15 図）。

第Ⅰ段階は、旧地形を掘削し、墳丘の基盤となる地山面を露出させる工程である。掘削では、土壌化した地山の旧表土が第 1 トレンチや墳頂部調査区のサブトレンチにて確認されていることから、大きく地形を変更していない。周囲の地形観察から、当該地は緩やかな傾斜地であったと想定され、その旧表土を水平に削り残すことで、墳丘基盤を形成している。

第Ⅱ段階は、墳端に周溝を掘削し、墳丘の平面形を定める工程である。周溝は墳丘を全周しており、これにより、墳丘の平面形及び墳端が定まっている。また、千人塚 1 号古墳は二段築成であることが確認されており、周溝設定による地山の掘削により、一段目のテラス面が形成されている。

第Ⅲ段階は、墳丘の二段目成形の端緒として、墳端に土塁状の高まりを設置する工程である。一段目のテラス面の表現のため、周溝から延長する墳丘面よりやや中心側へずらした位置に土塁状の高まりを設置している。盛土には土壌化した黒褐色土が混じることから、周溝掘削時の廃土の利用が想定される。



第 15 図 墳頂部東西ベルト及び第1トレンチの層位にみる千人塚1号古墳の築造工程

第Ⅳ段階は、土塁状の高まりの内部を盛土で充填し墳丘を完成させる工程である。墳端の土塁状の高まりよりさらに内側においても、同様の高まりが確認されており、同心円状に土塁状の高まりを設置し、その内部を充填する工程を繰り返すことで墳丘を形成した可能性がある。また、葺石の設置もこの段階である。

第Ⅴ段階は、墓坑を掘削する行程である。墓坑埋土の可能性のある土層が僅かに確認されたのみであり、明確ではないが、層位観察より構築墓坑である可能性は低く、墳丘完成後もしくは途中で上面から掘削された、竪穴系の埋葬施設であったと推察される。

以上のように、千人塚1号古墳の築造工程を復元した。限られた調査範囲の上、墳頂部が大きく掘削を受けており、不確かな点も多いが、旧地形を活かし、比較的土木量を抑えて築造された古墳であることが明らかとなった。また、埋葬についても、墳丘完成後に墓坑を掘削している可能性があることを示した。なお、現在の墳頂部は広い平坦形を呈しているが、これは墳丘完成後の後世の改変であり、本来の墳丘形とは異なる可能性が高い。

第4章 考 察

1 『養老郡志』に見る千人塚1号古墳の諸様相

(1) はじめに

岐阜県養老郡養老町養老に所在する千人塚1号古墳は、養老山地に形成された標高約50mを測る下位段丘面に立地しており、周囲に点在する数基の古墳と併せて、千人塚古墳群と総称されている。過去の報告によれば12～13基からなる古墳群であったようであるが、平成14～18年度にかけて養老町教育委員会が実施した遺跡分布調査では、5基の確認にとどまっている。千人塚古墳群周辺は、大正～昭和初期にかけて、養老公園の玄関口として発展した地域であり、それに伴う開発等により小古墳は滅失してしまった可能性が高い。なお、千人塚古墳群は、過去に白石古墳群という名称での報告もあり混乱が見られたが、養老町教育委員会の遺跡分布調査により、白石古墳は独立した古墳であり、千人塚古墳群とは別の遺跡として評価し直されている*。

そうした中、令和元年度から令和3年度にかけて、千人塚1号古墳の範囲確認調査及び家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査が行われ、古墳の全容が概ね明らかとなった。調査の成果によれば、千人塚1号古墳は、葺石や周溝、円筒埴輪を伴う、5世紀後半頃に築造された全長35.0mの円墳であるが、その主体部は墳丘完成以降かつ墳頂部に建っていた家屋建設以前に大きく掘削を受けており、埋葬施設はほぼ滅失していることが確認された。主体部が受けている掘削の規模は、南北4.0m、東西3.7m以上、深さ1.3m以上に及んでいる。その時期について、『養老郡志』には、同古墳群内のいずれかと考えられる円墳において、過去に地元住民による発掘が行われた記録が残っているが**、これが、千人塚1号古墳を示しているかどうかは、過去の名称の混乱や、いくつかの古墳の滅失等により、確証が得られていない。

今回、範囲確認調査及び家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査により、千人塚1号古墳の墳形や規模、その改変状況が概ね明らかとなった。この調査結果と、『養老郡志』にある千人塚古墳群に関わる記載について比較を行い、千人塚1号古墳の中心部が掘削を受けた時期や、調査で得られなかった埋葬施設の形態について考察してみたい。

(2) 『養老郡志』千人塚古墳群関連記述の整理

『養老郡志』（以下、『郡志』）は、大正14（1925）年に岐阜県地方改良協会養老郡支会から発刊され、養老町出身の郷土史家、大久保休吾氏が編纂した郷土史書である。養老郡における元庄屋や地主、神社仏閣、古文書、伝説、由緒、政治、文化、歴史等について参照できる重要な文献史料である。

中でも、千人塚古墳群については、「古墳千人墳」の注記のもと、『郡志』の巻頭写真に古墳の近景が掲載されており、当時の郡内における知名度の高さを窺い知ることができる。

* 中島和哉編 2007 『養老町遺跡詳細分布調査報告書』養老町教育委員会
** 岐阜県地方改良協会養老郡支会 1925 『養老郡志』

また、本文中では、「第二十章 名勝舊蹟古墳」において、千人塚古墳群の所在や規模、その由緒等について1頁程度の記述が見られる。その中に、同古墳群内のいずれかと考えられる円墳において、地元住民らによる過去の発掘の様子が報告されている。ここでは、以下にその一部を抜粋し、内容についての整理を行った。

「養老村大字白石地内字千人墳に在り。面積四畝十五歩の円墳にて、中央に深四尺周囲十八間の穴あり。墳上百本程の松繁茂せり。里老曰く今より約四十年前我等五六人にて発掘せし事あり。中央にて一間程掘りしに大なる蓋石あり。石室の大さ高さ五六尺、幅六七尺、奥行七八尺程ありて南面せり。石量普通の車に六七台ありき。尚一丈程掘りたれども何物もなかりき。又四尺程掘りしに、一体の石仏現れ、今広幡村飯木近澤重右衛門方に祀れりと。其石仏は石質砂岩にて面部は既に消磨して明かならざれども、肉髻あり、螺髪あり、法界定印を結びたる大日如來の像にて、大さ高さ一尺三寸、幅中央にて六寸あり。思ふに往古嘗て此古墳を発掘せし事ありて、内容物を採取し去り。之に代ふるに石仏を納め埋藏せしものなるべし。」

(『養老郡志』867・868頁より一部抜粋、一部旧字体を常用漢字に修正した。)

まず、その所在について、「養老村大字白石地内字千人墳」とあるが、これは現在、千人塚古墳群の所在地である養老町養老字千人墳周辺の古い地名であり、この報告文が千人塚古墳群を示していることはまず間違いない。

続いて、古墳の規模や形態については、面積四畝十五歩(約446㎡)の円墳であり、中央に深さ四尺(約1.2m)、周囲の長さが十八間(約33m)の穴が開いていたという。また、その穴は、約40年前に地元住民達により掘削された形跡であるという。これは、『郡志』の刊行年から遡ると、明治18(1885)年頃の出来事と考えられる。

掘削時の状況については、古墳中央にて一間程(約1.8m)掘り下げたところで大きな蓋石があり、高さが五・六尺(約1.5～1.8m)、幅が六・七尺(約1.8～2.1m)、奥行き(長さ?)が七・八尺(約2.1～2.4m)、正面が南向きの石室を発見したとある。また、その石量は、普通の車に6・7台分あったとされ、ここでいう普通の車が具体的に何を指すかは明確ではないが、大八車などの人力で荷物を運ぶいわゆる荷車であろう。

さらに、一丈程(約3m)掘り下げたが副葬品等は何も見つからなかったこと、四尺程(約1.2m)掘り下げた際に、石仏が一体出土したことが報告されている。出土した石仏については、明治期の発掘以前に、既に掘削により内容物が持ち出されており、その代わりに収められたものではないかと推測されている。

以上、『郡志』にある千人塚古墳群関連の記述について、簡単ではあるが整理を行った。それによれば、千人塚古墳群内のいずれかの円墳において、明治中頃に地元住民数名が古墳の中央部を掘削し、石室を発見したが、副葬品等は見つからず、その代わりに石仏が一体出土したことから、それ以前にも古墳は掘削を受けており、内容物が持ち出されている可能性があることを読み取ることができた。

（３）発掘調査成果との比較

続いて、令和元年度から令和３年度にかけて行われた、千人塚１号古墳の範囲確認調査及び家屋解体に伴う墳頂部の発掘調査の成果との比較から、『郡志』に記述されている千人塚古墳群内の円墳（以下、『郡志』円墳）が、千人塚１号古墳か、または同古墳群内のその他古墳（滅失も含め）かを検証したい。

まず、古墳の規模について、『郡志』円墳は、墳丘面積四畝十五歩（約 446㎡）であり、面積からその全長を計算すると約 24 m となる*。発掘調査の成果によれば、千人塚１号古墳は全長 35.0 m の円墳であるが、これは周溝最深部の傾斜変換点を結ぶことで計測した大きさである。現在、古墳の周溝は完全に埋没し、現地で目視にて確認できるのは墳丘の高まりのみである。これは、『郡志』刊行当時も同様であったと推察される。参考に、千人塚１号古墳の周溝を除いた墳丘のみの全長を測ると約 28 m 前後であり（本報告第３章第 12 図参照）、『郡志』円墳の規模と近い値である。

また、『郡志』円墳の中央には、明治中頃に地元住民が掘削を行った痕跡である、深さ四尺（約 1.2 m）、周囲の長さが十八間（約 33 m）の穴が開いていたという。千人塚１号古墳の発掘調査においても、主体部が墳丘完成以降かつ墳頂部の家屋建設以前に大きく掘削を受けた痕跡が見つかり、その規模は確認できた範囲だけでも、南北 4.0 m、東西 3.7 m 以上、深さ 1.3 m 以上、周囲の長さ 14 m 以上を測る。また、調査において、その掘削坑の中間土層が一部土壌化していることから、宅地化前は完全には埋没していない坑が残った状態であった可能性を指摘した（本報告第 3 章）。

以上より、『郡志』円墳の記述は、発掘調査より明らかとなった千人塚１号古墳の成果と共通項が多く、両者を同一の古墳と考えるのが妥当であろう。いくつか異なる点もあるが、『郡志』円墳にて発見されている石室が、千人塚１号古墳の発掘調査では確認できていないことについては、『郡志』円墳の石室の石が荷車に 6・7 台あったことが報告されており、そのほとんどは運び出されている可能性が高い。また、千人塚１号古墳の墳頂部には、家屋の庭石としての利用が想定される石が数基露頭しており、容易に運搬できる大きさではないことから、これらが石室由来の可能性もある。最後に、『郡志』にある古墳の掘削深度について、発掘調査により確認された後世の掘削坑の深度よりも深い印象を受けるが、宅地化による墳頂部の削平が大きかったことを示している可能性がある。



墳頂に露頭する石

（４）埋葬施設に関する一考察

千人塚１号古墳の発掘調査では、主体部に残る後世の掘削坑のため、埋葬施設はほぼ遺存していなかったが、墓坑底部付近の埋土の可能性のある土層が僅かに確認されており、埋葬施設は竪穴系

* $\pi = 3.14$ として円の直径を求めた。

である可能性が高いと考えた。また、その埋葬方法については、掘削坑から大きな石や粘土等が検出されていないことから、外槨施設を持たない木棺直葬の可能性があると推察した。

本考察により、『郡志』にある千人塚古墳群関連記述が、千人塚1号古墳を示していることが明らかとなったが、そこには、石室の発見に関する記述がある。これは、発掘調査の成果とは相違があるが、前述したように、明治期の掘削時に荷車6・7台分の石をほとんど運び出してしまっているとすれば、本来は石室が存在していた可能性も十分考えられる。ここでは、『郡志』の記述から読み取れる、埋葬施設の様相について、若干の考察をしてみたい。

『郡志』によれば、古墳中央にて一間程（約1.8m）掘り下げたところで大きな蓋石があり、高さが五六尺（約1.5～1.8m）、幅が六七尺（約1.8～2.1m）、奥行き（長さ?）が七八尺（約2.1～2.4m）、正面が南向きの石室が確認されている。石室の向きなど、発掘調査の成果と合致しない部分もあり、どこまで信憑性のある数字かは疑問は残るが、その規模を概観すると、高さや幅が大きい印象を受けるものの、少なくとも長さの短い小型化した竪穴式石室（石槨）であったと解釈できる。千人塚1号古墳の築造年代である5世紀後半頃の美濃地域の類例を散見すると、池田町の願成寺西墳之越36号墳や*、大野町の野7号墳において**、同時期の竪穴式石室（石槨）が確認されている。いずれも全長が4mを超えない小型化した石槨を持ち、比較的小さな石を積むことで石槨の壁体を構成している。この点について、千人塚1号古墳の墳頂部の発掘調査では大きな石は確認されていないが、墳頂の宅地化に伴う攪乱土内より直径30～40cmの塊石が多く見つかり、これらが石室（石槨）の壁体に由来するものである可能性も考えられる。また、そうであるならば、荷車により人力にて運び出すことも可能であっただろう。

以上より、千人塚1号古墳の埋葬施設については、発掘調査の成果によれば外槨施設を持たない木棺直葬の可能性を指摘したが、『郡志』の記述とあわせて鑑みると、竪穴式の石室（石槨）を備えていた可能性が高いと考えられる。それは、5世紀後半頃の小型化した竪穴式石室（石槨）であり、残存していれば、美濃地域でも類例の少ない、最終段階の竪穴式石室（石槨）として貴重な資料を提示できただろう。後世の掘削により滅失していることが非常に残念でならない。

なお、『郡志』にある、さらに掘り下げた際に出土した石仏については、養老山麓に多芸七防と呼称される中世山岳寺院跡群が分布しており、その墓域にて多数確認される砂岩製の石仏や五輪塔と同様のものである可能性が高い。このことから、千人塚1号古墳の埋葬施設は、少なくとも2度の後世の掘削を受けており、その時期は、中世以降と明治期であると考えられる。

（5）おわりに

千人塚古墳群は、『郡志』の巻頭写真に掲載されるなど、大正時代の郡内において非常に知名度が高く、当時の養老公園のパンフレットや小冊子などにも多数紹介されていた古墳群である。しかし、現在ではその多くが滅失してしまっており、それらの記述がどの程度の正確性を持つかは分かっていなかった。

* 横幕大祐編 2001『岐阜県史跡願成寺西墳之越古墳群36号墳発掘調査報告書』池田町教育委員会
** 大野町教育委員会 1984『史跡野古墳群調査概報（Ⅱ）—第七号古墳の調査—』

そのため、本考察では、千人塚1号古墳の発掘調査成果と『養老郡志』の記述内容について比較検証を行った。結果、『郡志』に報告されている古墳が、千人塚1号古墳であることが明らかとなり、そのことから、ほとんど滅失してしまっている埋葬施設の様相について考察を加えることができた。発掘調査の結果と一致しない部分もいくつかあるが、調査では知り得なかった情報について、文献資料の記述から補完することができた点は重要と考えている。

『養老郡志』には、千人塚古墳群内の他古墳からの出土物や、滅失古墳の位置・規模等についても記述が見られる。本考察では言及できなかったが、今後も、これらの史料を参考にし、未確認古墳の発見や、古墳群全体の解明に努めたい。

第 5 章 総 括

千人塚 1 号古墳は 5 世紀後半頃に造営された、全長 35.0 m の円墳であり、養老町において初めて埴輪が出土した、町内最大の円墳であることが、発掘調査により明らかとなった。埴輪・葺石・周溝を備えている古墳としては町内唯一であり、また、5 世紀末という時期を見れば、西濃地域（揖斐川町、池田町、大野町、垂井町、関ヶ原町、大垣市、海津市）においても、現在その存在が確認されている円墳としては最大級と考えられ、当該地域の古墳時代研究に重要な資料を呈示したといえる。

千人塚 1 号古墳を含む千人塚古墳群の造営は、古事記や日本書紀に記述のあるヤマトタケル伝承を考える上で重要と考えられる。古代の養老町は「多伎郡^{*}」と呼称されており、この「タギ」の地名には、ヤマトタケルが伊吹山の荒ぶる神に敗れ、伊勢街道を南下する際、当芸野の上にて、足が「タギタギしく」なり歩けなくなったとの由来が伝わっている。『養老郡志』によれば、当芸野は「養老公園の東方、千人墳附近の野」とされており、同地にこの時期最大級の古墳が確認されたことから、この辺りが古代多伎郡の重要地であった可能性が高まったといえるだろう。このことから、ヤマトタケル伝承が色濃く残る街道沿いに立地し、元正天皇の養老改元や養老孝子伝説の舞台となった養老の滝に最も近い古墳である千人塚 1 号古墳の被葬者は、後に美濃国唯一の「建部郷」が成立するなど、古代日本の重要地であった多伎郡の基盤を形成した有力者だと考えられる。

ただし、千人塚 1 号古墳は、古墳築造以降かつ墳頂家屋建設以前に大きく主体部を掘削されており、埋葬施設がほとんど遺存していないことも明らかとなった。その時期については、中世以降と明治期の少なくとも二度が想定できた。この主体部に残る掘削痕については、本報告では、明治期の地元住民による発掘である可能性に配慮し明言は避けたが、正式な手続きなく古墳を掘り起こしている意味からすれば、「盗掘」と呼ばざるを得ない事象である。古墳が盗掘を受けていたことが明らかとなり、文化財保護の観点からは非常に残念な報告となったものの、この結果は千人塚 1 号古墳の文化財的価値を損なうものではなく、むしろこれ以上の損壊や滅失がないよう、町の重要な文化財として保護・活用する必要性を高めたと考えている。

現在において本報告書をまとめることができたのは、地元の皆様をはじめ、多くの方々のご理解とご協力によるものである。特に古墳周辺の住民の方々には多くのご助力を賜った。記して感謝を申し上げたい。

* 「多伎郡」の表記に関しては複数の用字があるが、郡名の初見として登場する「続日本紀」を参照した。

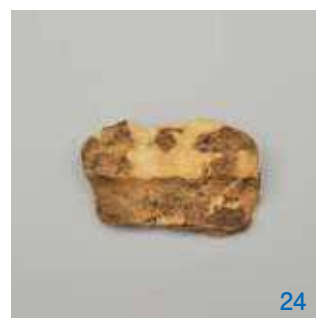
発掘調査出土遺物写真



第 11 図 千人塚 1 号古墳出土埴輪（第 1 トレンチ 1 ～ 15）



第 11 図 千人塚 1 号古墳出土埴輪（第 2 トレンチ 16 ～ 21）



第 11 図 千人塚 1 号古墳出土埴輪（第 3 トレンチ 22 ～ 24）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	せんになづかいちごうこふんぐんはつくつちようさほうこくしよ
書 名	千人塚 1 号古墳発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	養老町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 12 集
編 著 者 名	廣瀬 正嗣
編 集 機 関	養老町教育委員会
所 在 地	〒 503-1392 岐阜県養老郡養老町高田 798
発 行 年 月 日	西暦 2023 年 3 月 31 日

ふ り が な	ふ り が な	コ ー ド	北緯・東経	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	町村遺跡番号	° ' "	m ²	
せんになづか 千人塚 1 号古墳	ようろうちよう 養老町	38Y05882	北緯 35° 17' 20" 東経 136° 33' 01"	90.8	範囲確認 遺跡整備

所収遺跡名	主な時代	種 別	主 な 遺 構	主な遺物	特 記 事 項
千人塚 1 号古墳	古墳	古墳	円 墳	埴輪	古墳時代中期の古墳

養老町埋蔵文化財調査報告書 第12集

千人塚1号古墳発掘調査報告書

2023年3月

編集発行：養老町教育委員会

印刷：ナカシャクリエイト株式会社